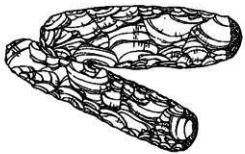
信濃町の埋蔵文化財

七ッ栗遺跡

発掘調査報告書

—神子柴型石斧と旧石器・縄文時代の遺跡—



2008

長野県信濃町教育委員会

信濃町の埋蔵文化財

七ッ栗遺跡
発掘調査報告書

—神子柴型石斧と旧石器・縄文時代の遺跡—

2008

長野県信濃町教育委員会

例　　言

1．本書は平成5・6年度県道水穴古間(停)線道路改良工事および8年度町道普光寺線建設工事にかかわる七ッ栗遺跡の発掘調査報告書である。

2．県道部分の調査は、長野建設事務所の委託を受けた信濃町教育委員会が、平成5年10月19日から平成6年7月25日にかけて実施した。整理作業は平成5年10月から平成7年3月にかけておこなった。

　また、町道部分の調査は信濃町の委託を受けた信濃町教育委員会が、平成8年9月17日から平成8年10月23日にかけて実施した。整理作業は平成8年10月から平成9年3月にかけておこなった。

　報告書作成のための作業は、平成19年12月までにおこなった。

3．本書に掲載した地図は、信濃町作成の都市計画図および国土地理院発行の地形図(1/25000)を使用した。

4．本書で扱っている国家座標は、ことわりのないところ以外は2002年以前の日本測地系（旧測地系）である。

5．本書作成に至る分担は、下記のとおりである。

　遺物・記録整理・石器実測・土器拓本・図版作成

　　高橋　哲・川端結花・佐藤ユミ子・今井美枝子・万場弘美・中村由克

　執筆（Ⅰ～Ⅵ1、Ⅶ、Ⅷ）および編集　　中村由克

　Ⅵ・Ⅷ2の執筆・図版作成　　立本宏明

6．調査によって得られた諸資料は、野尻湖ナウマンゾウ博物館で保管している。出土資料の注記番号は、次のとおりである。

　七ッ栗遺跡　　93NN、94NN、96NN

目　　次

例言・目次

Ⅰ　調査の経過 …… 1

1　調査にいたる経過 …… 1

2　調査体制 …… 1

3　調査経過 …… 2

Ⅱ　発掘地の状況と調査の概要 …… 2

1　発掘地の状況 …… 2

2　発掘地の地形と地質 …… 2

Ⅲ　Ⅰ区（高速道交差部南側地点） …… 6

1　遺構・遺物の出土状況 …… 6

2　旧石器時代の石器 …… 6

3　縄文時代の土器 …… 9

4　縄文時代の石器 …… 11

5　平安時代の遺物 …… 11

Ⅳ　Ⅱ～Ⅴ区（高速道交差部北側地点） …… 11

1　遺物の出土状況 …… 11

2　縄文土器 …… 11

Ⅴ　Ⅵ区（町道地点） …… 14

1　遺構・遺物の出土状況 …… 14

2　旧石器時代の石器 …… 14

3　縄文時代の遺物 …… 17

Ⅵ　七ッ栗遺跡出土の局部磨製石斧 …… 21

1　石器の出土状況 …… 21

2　石器の記載 …… 21

3　出土状況からみた遺跡の性格 …… 24

4　石器の時期的位置づけ …… 24

Ⅶ　野尻湖周辺の神子柴系石器群の石材 …… 26

1　野尻湖遺跡群における神子柴系石器文化の遺跡 …… 26

2　野尻湖周辺の神子柴系石器群の石器の来歴 …… 26

3　野尻湖周辺の神子柴型石斧の石材 …… 27

4　神子柴系石器群の石器表面にみられる特徴と遺跡での埋積条件 …… 28

Ⅷ　まとめ …… 29

1　旧石器時代の成果 …… 29

2　神子柴文化の成果 …… 30

3　縄文時代の成果 …… 30

引用文献 …… 30

図版 …… 32

英文要旨 …… 71

報告書抄録 …… 72

Ⅰ　調査の経過

1　調査にいたる経過

県道水穴古間(停)線は、信濃町大字富濃から大字古間にかけての道路で、富濃諏訪ノ原～水穴地区の水田面となっている低湿地のまわりを取り巻く丘陵、台地の縁辺部にそって延びている。

平成4年7月に信濃町教育委員会では、長野建設事務所が平成5年度事業として、七ッ栗地籍において県道拡幅改良工事を予定していることを知り、遺跡の保護対策を早急に協議する必要があることが判明した。9月29日には長野県教育委員会、長野建設事務所、信濃町建設課、信濃町教育委員会の4者で遺跡の保護協議をおこない、七ッ栗遺跡の発掘調査をおこなうことが決定された。

工事は平成5年～6年度の2か年で、全体延長1,300mの計画である。平成5年度は、このうち高速道交差部の南側のⅠ区で、幅員10mの道路工事がおこなわれることになった。発掘調査は信濃町教育委員会が主体者となって、平均9m幅で、150m、1,080㎡以上を発掘調査する予定をたてた。

平成5年5月26日付　　長野建設事務所長より文化財保護法第57条3第1項の規定による「埋蔵文化財発掘通知」の通知がある。

平成5年7月12日付　　信濃町教育委員会教育長より文化財保護法第98条2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の通知」を提出する。

平成5年10月19日付で長野建設事務所長と信濃町が平成5年度発掘調査業務委託契約を締結した。信濃町教育委員会では、ただちに発掘調査の準備に着手し、10月19日には七ッ栗遺跡の発掘調査を開始し、12月9日にわたっておこなわれた。

平成6年度は、高速道交差部の北側のⅡ区～Ⅴ区で、幅員10mの道路工事がおこなわれることになった。発掘調査は信濃町教育委員会が主体者となって、平均9m幅で、150m、1,300㎡以上を発掘調査する予定をたてた。発掘調査は雪解けを待って、5月2日から7月25日にわたっておこなわれた。

整理作業は、平成5年12月からはじめられ、平成7年3月までおこなわれた。

平成8年には、町道普光寺線建設工事が計画された。

平成8年7月10日付　　信濃町長より文化財保護法第57条3第1項の規定による「埋蔵文化財発掘通知」の通知がある。

平成8年8月12日付　　信濃町教育委員会教育長より文化財保護法第98条2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の通知」を提出する。信濃町教育委員会では、ただちに発掘調査の準備に着手し、9月17日には七ッ栗遺跡の発掘調査を開始し、10月23日にわたっておこなわれた。

2　調査体制

平成5・6年度

調査主体者	信濃町教育委員会	教育長	片山幹威
事務局	信濃町教育委員会		
	総務教育課	課長	山崎功一
			(5年度)
			永井　久
			(6年度)
	総務教育係	係長	松木武夫
	文化財担当者		渡辺哲也
調査担当者	中村由克		
調査参加者	池田か已子、今井美枝子、小日向キヨ子、片山トヨ、木村キミ子、小林光意、小林ヨシエ、佐藤ユミ子、関塚　恒、竹内晴江、竹内ゆき子、中沢光江、中村正枝、中村ヨネ子、永原シズエ、東　貢、福沢キサエ、渡辺　稔、山下紀代		

平成8年度

調査主体者	信濃町教育委員会	教育長	小林一盛
事務局	信濃町教育委員会		
	総務教育課	課長	北村敦博
	総務教育係	係長	松木武夫
	文化財担当者		渡辺哲也
	係		高橋　哲
調査担当者	中村由克		

担当職員　高橋　哲

調査参加者　荻原敬蔵、黒田敏雄、小林栄子、駒村幸男、佐藤清子、渋沢ユキ子、吉川栄子、吉川酉、佐藤ユミ子、万場弘美

なお、報告書作成にあたっては、次の方がたにご指導・ご援助いただいた。ここにご芳名を記し、感謝の意を表する次第である（敬称略）。

縄文土器：小笠原永隆・綿田弘実・贄田明

石器ほか全般：川端結花・大竹憲昭・谷和隆・堤隆

英文校閲：Andren David Eliot

3　調査経過

平成5年度

10月19日　発掘調査の準備に入る。

10月21日　発掘調査範囲の幅杭設置。

10月22日　Ⅰ区の試掘調査をおこなう。

10月25日　重機によるⅠ区の表土剝ぎ。試掘調査。

10月29日　Ⅰ区の本格的な発掘調査を開始する。

11月8日　グリッド設定

11月11日　遺物平面図作成、遺物取り上げ開始。

11月25日　周辺地域の試掘調査開始。Ⅳ区の試掘溝より局部磨製石斧が出土。作業員渡辺稔氏、現場で病気のため倒れる。

11月29日　旧石器時代の礫群周辺の調査。

12月9日　5年度の現場調査を終了、撤収。

12月10日～　整理作業

平成6年度

5月2日　Ⅱ区の発掘作業に着手。表土剝ぎ。

7月6日　Ⅳ区吉川酉氏宅地地点の発掘作業に着手。

7月13日　Ⅳ区吉川和男氏宅地地点の発掘作業に着手。Ⅳ区吉川酉氏宅地地点の石斧出土地周辺の深堀

7月22日　6年度の発掘作業を終了。

7月25日　現場撤収。

7月25日～　整理作業。

平成8年度

9月17日　Ⅵ区の発掘調査開始。試掘調査。

9月20日　本格的な発掘調査を開始。

9月26日　遺物の取り上げ開始。

9月27日　測量開始。

10月14日　集石遺構以外の発掘終了。

10月23日　5年度の現場調査を終了、撤収。

Ⅱ　発掘地の状況と調査の概要

1　発掘地の状況　図1～図3・表1

七ッ栗遺跡は、野尻湖南方の信濃町富濃の西部、水穴の集落に所在し、鳥居川の支流・斑尾川に沿って南西―北東方向に延びる低湿地にのぞむ北西側丘陵の末端部に位置する。この谷（低湿地）は発掘地のすぐ北側付近で東向きに方向が変化している。

県道水穴古間（停）線とほぼ直交して、上信越自動車道が平成9年10月に建設されたが、その用地内の旧石器時代～平安時代の七ッ栗遺跡および旧石器時代前半期を中心とする日向林B遺跡とは隣接する位置関係にある。

今回の調査地点は県道水穴古間（停）線とそれに隣接する宅地、畑地とされていた平坦地であった。高速道交差部より南側をⅠ区、高速道交差部より北側にⅡ区～Ⅴ区、そしてⅠ区から東側に低地の方に降りる町道普光寺線用地をⅥ区とした。Ⅰ区の南には小さな沢があり、Ⅰ区南部からⅥ区は微高地として低湿地側に張り出した地形を呈している。Ⅴ区のすぐ北側には小さな沢が横切っている。発掘地付近は丘陵末端部の緩斜面ほぼ中央にあたり、道路はほぼ等高線に平行に作られていて、今回の発掘地は水穴地区の丘陵地の一番低い末端部を縦断する位置となっている。これに対して高速道は水穴地区の丘陵地を横断しており、七ッ栗遺跡、日向林B遺跡、日向林A遺跡（縄文時代）という順に順次比高が高くなる遺跡立地の場所を通っている。

斑尾川に沿った細長い低湿地は肥沃な水田地として利用されており、諏訪ノ原～水穴地区は背後に丘陵や山地がせまり、北西季節風をしのぐ温暖な南向き地形が続い

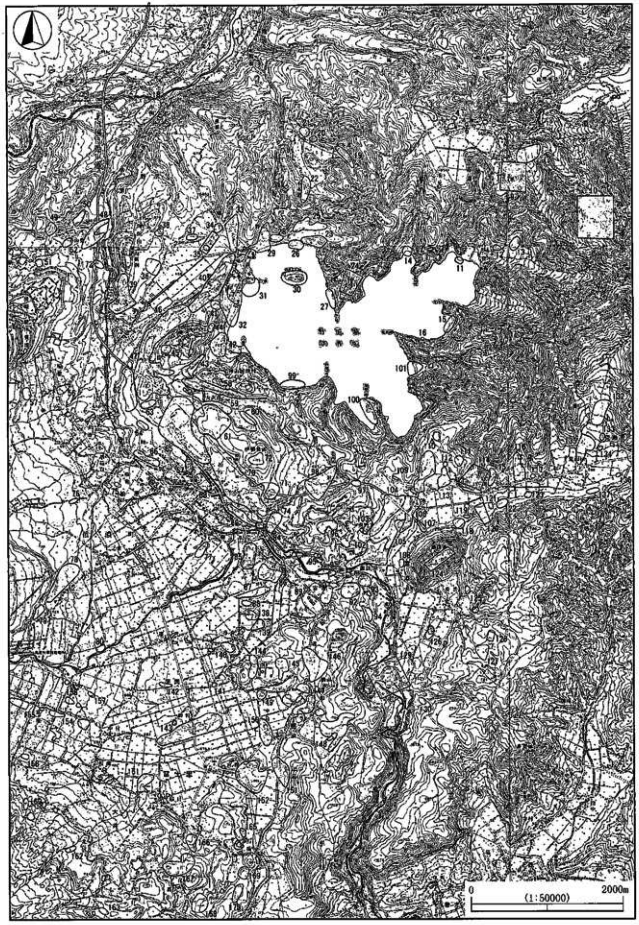


図1　野尻湖周辺の遺跡分布図　信濃町教育委員会原図（谷編2002のデータを使用）

表1　信濃町遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中近世
1	饗沢A	古海・饗沢		○			○	
2	饗沢B	古海・饗沢		○			○	
3	鳴岩A	古海・鳴岩					○	
4	鳴岩B	古海・鳴岩					○	
5	鳴岩C	古海・鳴岩		○			○	
6	鳴岩D	古海・鳴岩					○	
7	林跡	古海・林跡		○			○	
8	長ヶ入	古海・長ヶ入					○	
9	古海城跡	古海・宮川					○	○
10	宮川A	古海・宮川		○				
11	宮川B	古海・宮川		○			○	
12	寺窪	古海・宮川		○			○	
13	舟場	古海・舟場		○			○	
14	柳久保	古海・笛川柳久保			○			
15	九天角田土地	古海・笛川柳久保					○	
16	山平	旗坂・山平					○	
17	新川・新川城跡	野尻・新川		○			○	○
18	大本道A	野尻・大本道		○				
20	大本道B	野尻・大本道					○	
21	大本道C	野尻・大本道		○			○	
22	小本道	野尻・小本道		○				
23	野尻城跡	野尻・城跡						○
24	妙光路城跡	野尻・妙光路						○
25	城跡うち	野尻・城跡		○	○			
26	城ヶ岡	野尻・妙光路	○	○	○			
28	旧野尻湖中学校	野尻・舟場		○				○
29	杉久保	野尻・舟場	○	○			○	
30	鳩間島	野尻・鳩間島	○	○	○		○	○
31	江小島	野尻・舟場	○	○				
32	舟場	野尻・舟場	○	○	○		○	
33	川久保	野尻・川久保	○	○	○	○	○	
34	上七軒遺跡	野尻・上鶴		○				
35	小丸山・才鶴城跡	野尻・川久保	○	○				○
36	向笠山A	野尻・五輪	○	○			○	
37	向笠山B	野尻・土橋		○	○			
38	南鳴	野尻・西山	○	○				
39	清明台	野尻・西山	○	○				
40	仲町	野尻・一林浦東・上町	○	○	○	○	○	○
41	神山北	野尻・神山	○	○				
42	鳥久保	野尻・鳥久保	○	○	○		○	
43	神山A	野尻・神山	○	○		○	○	
44	神山B	野尻・神山		○				
45	神山C	野尻・神山		○				
46	照月台	野尻・鳥沢	○	○				
47	豆ノ木	野尻・豆ノ木	○	○			○	○
48	鳥尾山荒A	野尻・下山魚		○				
49	下山魚A	野尻・下山魚		○				
50	下山魚B	野尻・下山魚		○				
51	下山魚C	野尻・下山魚		○				
52	下山魚D	野尻・下山魚		○				
53	鶴巻	野尻・高沢		○				
54	上山魚A	野尻・上山魚		○			○	
55	上山魚B	野尻・上山魚		○				
56	鳴岩A	野尻・鳥居	○					○
57	鳴岩B	野尻・鳥居					○	
58	大久保A	柏原・寺向	○	○	○		○	
59	大久保B	柏原・寺向		○			○	
60	大久保C	柏原・中向		○			○	
61	大久保南	柏原・向山	○	○				
62	柏岡A	柏原・西岡	○	○				
63	柏岡B	柏原・西岡	○	○				
64	弔鶴	柏原・弔鶴		○				
65	上ノ原	柏原・上ノ原	○	○			○	
66	鶴ヶ石	柏原・鶴石	○	○			○	
67	野尻溯鮭地	柏原・小丸山		○			○	
68	小丸山公園	柏原・小丸山	○	○			○	○
69	夜鷹塚	柏原・夜鷹塚		○			○	○
70	宮裏	柏原・宮裏	○	○			○	○
71	裏ノ山	柏原・裏ノ山	○	○				
72	仲修見山	柏原・裏ノ山	○					
73	宮原城跡	柏原・宮原						○
74	鉄山	柏原・鉄山					○	○
75	鉄谷	柏原・鉄下		○			○	
76	新田川	柏原・新田川		○			○	
77	五輪宮	柏原・五輪宮		○			○	
78	仁之倉A	柏原・仁之倉		○			○	
79	仁之倉B	柏原・仁之倉					○	
80	仁之倉南	柏原・高原山		○			○	
81	長水A	柏原・長水					○	○
82	長水B	柏原・長水		○				
83	鳥居川第二発電所	柏原・梅原		○			○	
84	上ん	古海・上ん		○			○	
85	鶴原	宮野・鶴原					○	
86	一貝堀	古海・一貝堀		○			○	○
87	鶴塚A	古海・鶴塚		○			○	○
88	鶴塚B	古海・鶴塚					○	
89	小古岡	古海・久根路					○	
90	清水東	古海・清水東	○	○			○	
91	清水氏	古海・清水氏					○	
92	吹野道A	古海・吹野原	○	○			○	
93	吹野道B	古海・吹野原	○				○	
94	山鶴	富倉・山鶴		○	○		○	
95	宮殿支新島	古海・下島					○	
96	大平A	富倉・大平		○			○	
97	大平B	富倉・大平	○	○	○			
98	鉄ノ本	富倉・鉄ノ本	○	○			○	
99	砂田	富倉・砂原	○	○	○			
100	段堂ヶ崎	富倉・西原		○	○			
101	宮原	富倉・宮原		○				
102	鶴舞ノ原	富倉・鶴舞ノ原		○			○	
103	鶴舞加	富倉・鶴舞ノ原		○			○	
104	日向林A	富倉・日向林		○				
105	日向林B	富倉・日向林	○	○			○	○
106	七ツ巣	富倉・七ツ巣	○	○	○		○	
107	曽老田	富倉・曽老田		○			○	
108	庚申堂	富倉・庚申堂					○	
109	西久保	富倉・水穴					○	
110	水穴	富倉・水穴					○	
111	大日方A	富倉・大日方					○	
112	大日方B	富倉・大日方					○	
113	富倉原	富倉・原		○			○	
114	熊ヶ島城跡	富倉・熊出						○
116	鬼原	富倉・鬼原		○			○	
117	鳴沢	富倉・鳴沢		○			○	
118	南原A	富倉・南原		○			○	
119	南原B	富倉・南原					○	
120	乙原	富倉・南原					○	○
121	中村	富倉・中村					○	
122	日朝A	富倉・日朝					○	
123	日朝B	富倉・日朝					○	
124	諏訪原城跡	富倉・舟倉山髭櫓						○
125	舟倉	富倉・舟倉		○				
126	向ノ原	富倉・向ノ原					○	
127	鷲ノ神	富倉・鷲ノ神勘蔵					○	
128	鶴城	富倉・鶴城					○	
129	戸尾城跡	富倉・鳴沢					○	
130	戸倉	富倉・清水		○	○		○	
131	正徳寺	荒瀬原・正徳寺			○			
132	荒瀬原駅	荒瀬原・駅			○		○	○
133	大原	荒瀬原・大原			○			
134	鳴心板鼻	荒瀬原・山神						○
135	石原	荒瀬原・石原		○			○	○
136	野尻	荒瀬原・野尻		○				
137	月影	荒瀬原・月影					○	
138	北ノ原A	平岡・北ノ原					○	
139	北ノ原B	平岡・北ノ原					○	
140	宮原	平岡・宮原					○	
141	丸山	平岡・丸山					○	
142	北山道	平岡・北山道					○	
143	御料	平岡・宮殿熊笹					○	
144	向原	平岡・向原					○	
145	丸谷地	穂波・丸谷地		○			○	
146	大道下	穂波・原・大道上・大道下	○	○			○	
147	前原（孔雀山）	穂波・九頭山・峰・谷道畑					○	○
148	上の山	穂波・上の山					○	
149	北中島	穂波・北谷地					○	
150	中島	穂波・蛇松・中島			○		○	
151	辻原	穂波・南平・辻下					○	○
152	宮ノ原	穂波・穂巻・南原		○	○		○	
153	宮ヶ原I	大井・宮ヶ原					○	
154	宮ヶ原II	大井・宮ヶ原			○		○	
155	宮ヶ原III	大井・宮ヶ原			○		○	
156	宮ヶ原IV	大井・宮ヶ原					○	
157	宮ヶ原V	大井・宮ヶ原					○	
158	宮ヶ原VI	大井・宮ヶ原					○	
159	宮ヶ原VII	大井・宮ヶ原					○	
160	長信	大井・聖仙寺					○	○
161	結勝	大井・結場					○	
162	七塚	大井・宮仙寺					○	
163	カジカガワ	大井・カジカガワ					○	○
164	妙福寺跡・聖仙寺	大井・宮原					○	
165	石橋	大井・新谷地					○	
166	市道	大井・市道			○			
167	高山	大井・高山			○		○	
168	清水久保	大井・同殿			○		○	
169	長山	大井・長山		○	○			
170	立堀B	大井・長山		○	○			
171	鶴地	柏原		○				
172	星光山荒B	野尻・下山魚					○	
173	大平C	富倉・鶴助原		○	○			

信濃町教育委員会（2003）〔谷福2002のデータを使用して改変〕

ており、冷涼な高原地帯の中でも比較的すごしやすい土地となっている。

2　発掘地の地形と地質

発掘地は県道水穴一古間(停)線と上信越自動車道の交差する場所にあたり、標高約643.5m～648mである。この付近は七ッ栗遺跡、日向林B遺跡が立地する丘陵の南東の縁辺部にあたる。道路を隔てた南東側は、北東一南西に延びる水田となっている低湿地である。

調査地付近では、後期更新世の水成の野尻湖層相当層や風成の野尻ローム層が堆積しており、その上位を風成の柏原黒色火山灰層がおおっている。

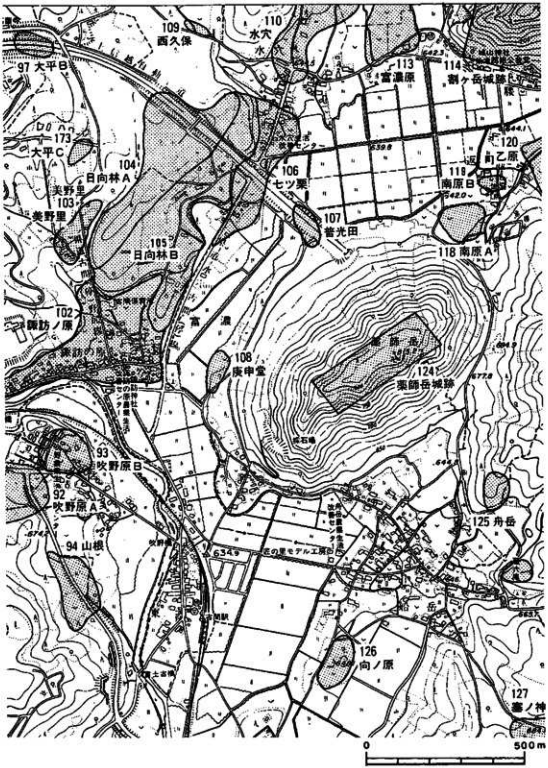


図2　七ッ栗遺跡周辺の遺跡　信濃町教育委員会（2003）

発掘地のⅠ区では、中部野尻ローム層以上の、風化火山灰層が確認された。Ⅰ区では、下位より上部野尻ローム層Ⅰの褐色ローム層20cm＋、15～20cmの黒色帯、13cmの上部野尻ローム層Ⅱ最下部（上Ⅱ最下部）、20cmの上部野尻ローム層Ⅱ下部・上部（上Ⅱ下部・上部）、15～20cmの上部野尻ローム層Ⅱ最上部（モヤ）、25cmの柏原黒色火山灰層下部、8cmの柏原黒色火山灰層上部、耕土15～20cmという層位がみられた。なお、Ⅰ区、Ⅵ区では上部野尻ローム層Ⅱのほぼ中央付近から旧石器遺物が出土しており、上Ⅱ下部と上Ⅱ上部の境界付近にあたるので、上Ⅱ中部という文化層記載をした。

Ⅰ区調査後の工事では、道路西壁で野尻ローム層のほぼ全体の層序を確認することができた。下位より層序の記載をおこなう。20cm＋の下部野尻ローム層Ⅰ、41cmの下部野尻ローム層Ⅱ〔3点セット〕、101cmの下部野尻ローム層Ⅲ〔ブレッチャーゾーン、粉アズキ、ドライカレーを含む〕、22cmの中部野尻ローム層Ⅰ〔胃ヒゲを含む〕、21cmの中部野尻ローム層Ⅱ〔ニセノミを含む〕、12cmの中部野尻ローム層Ⅲ〔赤スコを含む〕、25cmの上部野尻ローム層Ⅰという層序で、すべて風成相であった。

Ⅵ区東端の一番低いところでは、下位より上部野尻ローム層の上に不整合で、18cmの砂礫まじり暗灰褐色土、40cmの炭、スコリアまじり暗褐色土（遺構覆土）、20cmの明黒褐色土（柏原黒色火山灰層下部）、10cmの黒褐色土（柏原黒色火山灰層上部）、20cmの旧耕土（明黒褐色土）があり、その上を客土された耕土が約40cmみられた。

Ⅲ　Ⅰ区（高速道交差部南側地点）

1　遺構・遺物の出土状況　図4～図6

縄文時代、平安時代の遺物が耕土直下の柏原黒色火山灰層中より散布して出土した。遺物はⅠ区のほぼ全域にわたって分布していた。遺構は伴わない。

旧石器時代では、F11グリッドに遺構、遺物が集中して出土した。1号礫群は、東西1.8m、南北1.3mの範囲内に、平均3～10cmの亜角礫が中心で、最大20×12cmの亜円礫を含む礫約110点が集中分布している。礫の集中度は弱く、散在している状態である。礫は上Ⅱ下部にささっており、その半分～2／3が上Ⅱ上部に覆われていることから、上Ⅱ下部と上Ⅱ上部の境界付近の層準に礫群の底面をもち、その時期に属するものと判断した。石器は、1号礫群の周辺に集中しており、ブロック1とした。

縄文土器はとくに集中する傾向はみられず、全般にわたって散布した状態であった。

遺物は、石器73点、縄文土器288点、礫225点、平安時代以降の遺物29点など615点が出土した。平安時代のものは、土師器23点、須恵器1点、灰釉陶器2点で、それ以降の時期の陶器2点、瓦1点がみられた。土製品はいずれも破片である。石器類は、旧石器時代と縄文時代のものが含まれる。

2　旧石器時代の石器　石器図版1・2

ナイフ形石器

1は、黒曜石製の石刃を素材としたナイフ形石器である。石刃の背面には一部自然面を残す。基部には打面を残し、基部の両側縁と先端の片側縁に刃潰し加工が施されている。

2は、珪質凝灰質頁岩製の石刃を素材としたナイフ形石器であり、先端側は欠損している。基部は石刃の打面を取り去り、腹面には面的な加工が施されている。

3は、黒曜石製の石刃を素材としたナイフ形石器で、石刃の末端を基部とし、基部の両側縁に刃潰し加工が施されている。背面の1面には自然面が残される。先端部は欠損する。

削器

4は、黒曜石製の石刃を素材とした削器である。腹面の左側縁に鋸歯状の刃部がつくられている。背面の左側縁には連続する微細剥離痕がみられる。末端を欠損する。

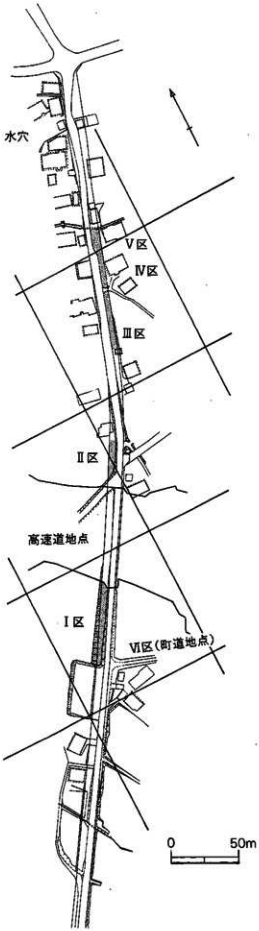
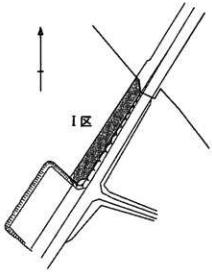


図3　七ッ栗遺跡の調査位置



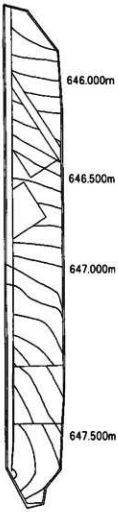


図4　Ⅰ区の調査区

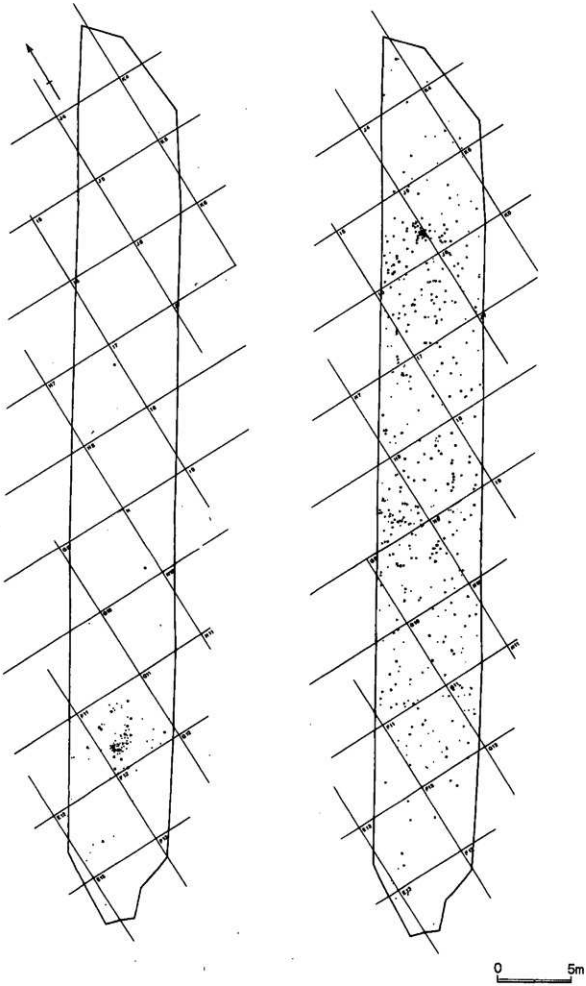


図5　Ⅰ区の遺物分布図　（左）旧石器時代　●：石器　・：礫
（右）縄文、平安時代　●：石器　△：土器　・：礫　○：平安時代土器

彫器

5は、明灰褐色の玉髄製の彫器である。分厚い石刃を素材としていて、石刃の打面部に側縁から剥離を加え、そこを打面として3面のファシットが入れられている。また、下端も同様に側縁から1回の剥離が入れられ、それを打面として3面のファシットが入れられている。側縁には、縁辺にそって調整がおこなわれている。

6は、珪質凝灰質頁岩製の石刃を素材とした彫器である。石刃の末端に主剥離面側からの調整をおこなった後、そこに背面側よりファシットを3面入れた彫器である。石刃の打面側には、背面側に2面のファシットが入れられて彫器の刃部が作出されている。側縁には主剥離面側に面的な浅い調整が施されている。石英、黒雲母などを含む酸性凝灰岩質である。

7は、黒曜石製の厚手の石刃を素材とした彫-掻器である。末端に3面のファシットが入れられている。打面側には急角度の加工で掻器の刃部がつくられている。

8は、灰白色～灰褐色の玉髄製の石刃を素材とした彫器である。石刃の末端側の側縁（背面では右側）を斜めに折り取り、末端の背面側に調整加工が施され、それを打面として腹面側に幅広のファシットが入れられている彫器である。もう一端の石刃打面は折り取り、その一端を打面として背面側に幅広いファシットが入れられて彫器としている。

9は、黒曜石製の石刃を素材とした彫-削器である。石刃の末端側に剥離をおこない、それを打面として小さなファシットが3面入れられている。側縁にはやや湾曲した調整が連続して施されており、抉入削器の刃部となっている。

石刃

10は、黒曜石製の微細剥離痕のある石刃である。背面の一部には自然面を残し、打面側の一部を欠損する。主剥離面側の側縁に面的な微細剥離痕がみられる。

11は、黒曜石製の微細剥離痕のある石刃である。側面の一部に自然面を残す。それを除く側縁には、微細剥離痕がまばらにみられる。

12は、黒曜石製の幅広で微細剥離痕のある石刃である。背面側の側縁には一部自然面を残す。背面左側縁の下部には、連続した若干湾入した面的な微細剥離痕がみられる。

13は、珪質凝灰岩製の石刃である。

14は、玉髄化した珪質頁岩の石刃である。

15は、黒曜石製の石刃である。

剥片

16は、黒曜石製の剥片である。側縁にはわずかに微細剥離痕がみられる。12、15、16は、赤褐色の部分を含む黒色黒曜石で、同一母岩と思われる。

3　縄文時代の土器　土器図版1～4・6

縄文時代早期、前期の土器が出土しており、前期中葉の黒浜式併行のものが多い。

1）早期

表裏縄文土器

1は、表裏縄文土器の口縁部である。裏面にはゆるく外反する口縁上端にのみ縄文がつけられている。赤褐色で、胎土には石英、角閃石などの火山灰起源の鉱物を少し含んでいる。器壁は約6㎜である。無節のｒの縄文を用いている。

撚糸文土器

2は、撚糸文土器の口縁部である。無節1の原体を用いている。赤褐色で、胎土には石英などの鉱物を比較的多く含む。器壁は約6㎜である。

1、2は、早期の押型文土器の前半期に伴うものと考えられる。

押型文土器・複合山形文

3は、複合山形文の押型文土器である。褐色で、胎土には石英などの火山灰起源の鉱物を多く含んでいる。器壁は約9㎜である。日計式に類似する。押型文土器の後半期のものと推定される。

条痕文土器

4は、早期後半の条痕文土器で、箆状工具を用いた刺突により矢羽状の文様がつけられている。また、口縁に刻みが入れられている。褐色で、胎土には繊維が多く含まれており、細礫も混じっている。器壁は約8㎜である。

5は、芋虫状で自縄自巻の絡条体圧痕文土器である。暗褐色で、胎土には石英などの火山灰起源の鉱物を多く含んでいて、繊維は含まない。器壁は約8㎜である。

7～9は、胎土に著しく繊維を含む条痕文土器である。褐色～赤褐色で、器壁は約10㎜前後で、本遺跡ではやや厚手である。

縄文土器

6は、縄文土器であり、単節ＬＲの縄文を用いている。やや厚手である。

2）前期

前期前葉・関山式併行

10は、関山式併行の土器の口縁である。横位、斜位に平行沈線がひかれ、部分的に刻みを施している。口縁には三角形状の、表面にはこぶ状の貼付文が施されている。褐色で、繊維は含まない。器壁は11㎜と、本遺跡では厚手である。

53は、単節ＲＬ・ＬＲの原体を用いた羽状縄文土器である。褐色で、胎土に繊維を多く含み、器壁は９㎜である。

前期中葉・黒浜式併行

竹管文土器

11～14は、平口縁で、体上半部に半裁竹管による波状文を横位にめぐらした土器である。下半部の地文には、単節ＲＬの縄文を用いている。赤褐色で、胎土には繊維を含んでいる。器壁は７～９㎜である。

15～22は、体上半部に半裁竹管による平行沈線文を横位にめぐらした土器である。下半部の地文には、無節Ｌの縄文を用いている。赤褐色で、胎土には繊維を含んでいる。器壁は６～９㎜ほどである。

23～34は、半裁竹管によるコンパス文が施された土器である。23～25には、裏面の口縁に連続爪形文がつけられている。暗褐色で、胎土には繊維が少量含まれている。器壁は６～７㎜のもと、８㎜を超えるものがある。

縄文土器

35は、平口縁で小振りな羽状縄文土器である。単節ＬＲ・無節ｒのやや粗い原体を用いている。暗褐色で、胎土には繊維を含む。器壁は８㎜である。

36～49は、羽状縄文土器である。単節ＬＲ・ＲＬの原体を用いている。50・51はやや粗い単節のＲＬ・ＬＲの原体を用いた羽状縄文土器である。いずれも、赤褐色～暗赤褐色で、胎土に繊維を含んでいる。器壁は８㎜前後である。

54は、単節ＲＬの縄文土器の底部である。

沈線文土器

55・56は、平口縁で、まばらな単沈線を横方向に間隔をあけて多段に施文し、その間を斜沈線で矢羽状の文様をうめている。口縁からは短い垂下隆帯が４単位につけられている。隆帯には刻みが入れられている。赤褐色で、胎土には細礫と繊維を多く含む。器壁は８～９㎜である。長野市松原遺跡遺構外に類例が出土している（贄田1998）。

前期後葉・諸磯式

竹管文土器

57は、半裁竹管による肋骨文の交点に、円形刺突文がつけられた土器である。暗褐色で、器壁は8.5㎜である。諸磯ａ式併行のものである。

集合沈線文土器

58・59は、半裁竹管による集合沈線がひかれ、その上に竹管による刺突がおこなわれた土器である。褐色で、器壁は８㎜である。諸磯ｃ式併行のものである。

62は、集合沈線文土器である。諸磯ｃ式併行のものと考えられる。

3）中期初頭・梨久保式併行

60は、沈線文土器である。連続爪形文を横方向に２段施文し、上半に半裁竹管による平行沈線文で矢羽根状文を施し、下半には斜めの平行沈線文にヘラ切り沈線文で格子目文を構成している。褐色で、器壁は約８㎜である。

61は、沈線文土器である。半裁竹管による平行沈線文を横方向に間隔をあけて多段に施文し、その間を斜めに沈線文でうめている。胎土には火山灰起源の石英などの鉱物を多く含み、やや赤みを帯びた褐色で、器壁は6.5～７㎜である。

63・64は、沈線文土器である。半裁竹管による斜めの平行沈線文にヘラ切り沈線文で格子目文を構成している。胎土には火山灰起源の石英などの鉱物を多く含み、褐色で、器壁は約8.5㎜である。

65は、半裁竹管による縦位の平行沈線文がみられるものである。褐色で、器壁は約8.5㎜である。

90は、沈線文土器である。口縁に渦巻状の突起がつけられ、口縁部には爪形文の連続施文がおこなわれている。口縁はくの字状に内折しており、半裁竹管による平行沈線文で区画された内部に、ヘラ切り沈線文で格子目文を構成し、それより下位には縦位に沈線が引かれ、地文に縄文がつけられている。赤褐色で、胎土には火山灰起源の鉱物を含み、器壁は約７㎜である。

91は、90と同様な半裁竹管による平行沈線文土器である。口縁はくの字状に内折しており、突起がつけられている。赤褐色で、器壁は６～７㎜である。

92は、細いそうめん状の粘土紐を貼り付けた土器で、格子目文を構成する。赤褐色で、器壁は6.5mmである。

4　縄文時代の石器　石器図版2～4

石鏃

44は、珪質凝灰岩製の石鏃である。無茎で、抉りが浅い凹基の鍬形鏃である。

45は、無斑晶質安山岩製の石鏃である。無茎で、抉りが浅い凹基の鍬形鏃である。

46は、黒曜石製の石鏃である。基部が尖る尖基石鏃である。

削器

47は、黒曜石製の抉入削器である。厚手の幅広剥片の末端側に抉入した刃部がつくられ、実測図の下端部には両面に調整が施されている。

48は、チャート製の削器である。幅広剥片の末端側にやや内湾気味の刃部加工が施されている。

石匙

49は、無斑晶質安山岩製の石匙である。幅広剥片を素材として、打面側につまみが作られ、末端側は直線的な形状の刃部が作られている。

50は、珪質頁岩製の石匙のつまみ部分の破損品である。縦長剥片を素材としている。

石錐

51は、珪質凝灰岩製の石錐である。両面加工で棒状の形状で、細身に尖らせている。

磨製石斧

52は、蛇紋岩製の磨製石斧である。両側縁を研磨して石斧主面とのあいだに稜をつくる定角式磨製石斧である。断面は隅丸長方形である。基部側は欠損している。

特殊磨石

53は、砂岩製の特殊磨石である。細長い礫を素材としており、長軸にそった尖った縁部をすり減らして磨面を作り出している。半分以上を欠損している。

磨石

54は、輝石安山岩の扁平な円礫を用いた磨石である。両面の扁平な2面を磨面としている。

凹石

55は、輝石安山岩製の凹石である。扁平な円礫を素材として、安定した平らな表裏2面に凹部をもつものである。扁平な面は磨面となっており、磨石・凹石併用の石器である。

石皿

56～59は、輝石安山岩の扁平な礫を素材として、平らな1面に磨面を有する石皿である。58は大形のものである。

59は、極粗粒砂岩の扁平な礫を素材として、平らな1面に磨面を有する大形の石皿である。いずれも破損品である。

5　平安時代の遺物

平安時代の遺物は、数が少なく、坏など土師器の小片がほとんどであり、わずかに灰釉陶器の皿か坏の小片が得られたにすぎない。遺構も未確認であることから、生活の場は発掘範囲外にあったと推定される。

Ⅳ　Ⅱ～Ⅴ区（高速道交差部北側地点）

1　遺物の出土状況　図7・8

発掘区最北のⅤ区L18グリッドで縄文土器20点が出土したほかは、遺物集中区は確認されなかった。このほか、石器2点、黒色土器1点、近世・近代以降の陶磁器類6点、礫片1点で、出土遺物の合計は30点に過ぎない。このうち、Ⅳ区K2グリッドの石器2点は神子柴型石斧であるので、Ⅵ章で詳しく記載、検討する。

2　縄文土器　土器図版5

竹管文土器

66・67は、連続爪形文が施された土器である。66は、

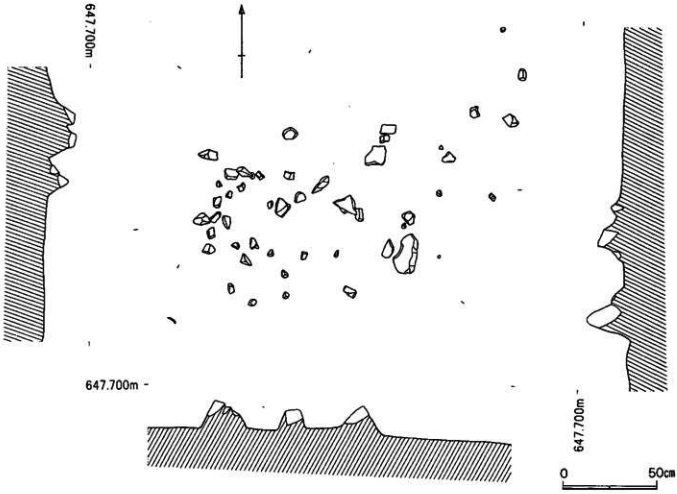


図6　Ⅰ区旧石器時代の1号礫群

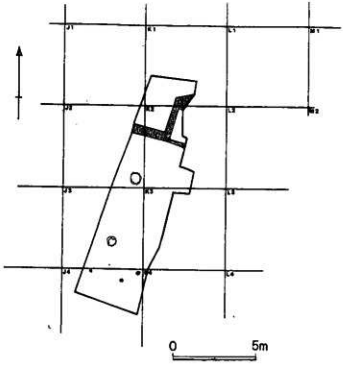


図7　Ⅳ区遺構配置図（灰色部は水道管のための未発掘区）

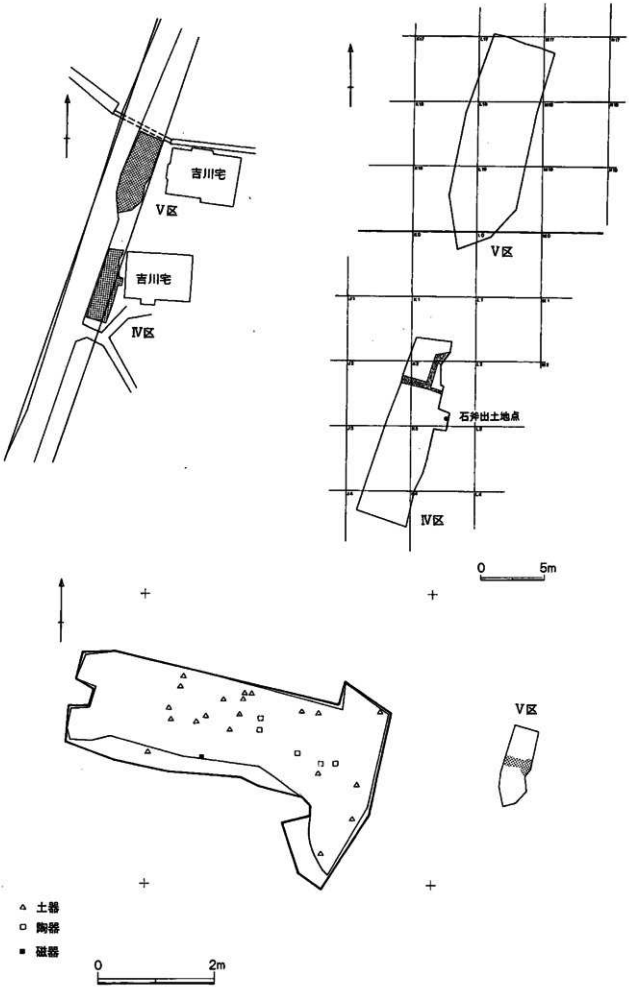


図8　Ⅳ区、V区の調査区（上）とV区縄文土器集中地点

地文に単節ＬＲの縄文がつけられている。褐色で、胎土に細礫を含み、器壁は11㎜と厚い。67は、褐色で、器壁は７㎜である。

68～70は、半裁竹管による肋骨文がつけられた土器である。交点には、円形刺突文がつけられている。赤褐色で、器壁は７～９㎜である。

71～73は、半裁竹管による沈線文土器である。72には沈線にそって連続爪形文がつけられ、73には沈線にそって刺突がつけられ、その内部には縄文が施文されている。

縄文土器

74～89は、縄文土器である。74～77、80、83は、単節ＬＲの縄文を用いている。78、79、81、82は単節ＲＬの縄文を用いている。84・85は細密な単節ＲＬの縄文を用いている。

86・87は、単節ＲＬの縄文を結節した縄文土器である。

88は、無節Ｌの原体を用いた縄文土器である。

89は、複節ＲＬＲの原体を用いた縄文土器である。いずれの縄文土器も、褐色、無繊維で、器壁は７～８㎜である。

以上の土器は、いずれも縄文時代前期後半の諸磯ａ式に併行するもので、１時期にまとめられるものと考えられる。

Ⅴ　Ⅵ区（町道地点）

１　遺構・遺物の出土状況　図９～12

県道接続部がもっとも標高が高く、低湿地に向けて次第に標高が下がる地形である。県道接続部に近いところを中心に、旧石器時代の石器が多く出土した。発掘により得られた遺物は602点あり、内訳は石器276点、縄文土器105点、平安時代以降の遺物10点（須恵器２点、土師器１点、陶器５点、鉄製品２点）、礫211点であった。

一番西側の県道近くの拡張区に礫群が１基確認された。礫群２は、2.5ｍ×1.3ｍの範囲内に、４～12㎝ほどの亜角礫約45点が散在して集中しており、集中度はよくない。上部野尻ローム層Ⅱ上部に包含される。遺物はこの周辺に多く出土した。№28、34～36の黒曜石製石器が伴った。

そのすぐ南には、７×６ｍの範囲のブロック２が分布する。約289点の石器、剥片、礫などが集中し、17、20、25、29、32、33、37～39の黒曜石製・珪質頁岩製・玉髄製石器が伴う。また、このブロック内には、下呂石製の小さな剥片１点№60（写真図版18－43）が出土した。ナイフ形石器文化の時期に属するものと思われる。

また、一番標高の低い東側の４区には、柏原黒色火山灰層中に約３ｍほどのやや方形？の落ち込みがみられ、その内部には２～23㎝ほどの亜角礫69点が集中する集石が確認された。層位は柏原火山灰層の下部で層位からは縄文時代の草創期～早期の頃と推定される。縄文土器３片、剥片４点（写真図版20－49）が伴ったが、土器は小片で文様・時期は確認できなかった。

２　旧石器時代の石器　石器図版５～７

旧石器時代の主な遺物は、以下のものである。

ナイフ形石器

17は、黒曜石製の石刃を素材としたナイフ形石器である。打面側を基部として１側縁の１／２ほど刃潰し加工が施されている基部加工のナイフ形石器である。

18・19・20は、黒曜石製の石刃を素材とするナイフ形石器である。石刃の打面側の両側縁に刃潰し加工を施した基部加工のナイフ形石器である。先端側は欠損する。18は、受熱石器で、表面はくすんでいる。

21は、無斑晶質安山岩製の石刃もしくは縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。打面側を基部として、１側縁全体と他側縁の１／２に刃潰し加工を施した二側縁加工のナイフ形石器である。石器集中区からは離れて発掘区東部に単独出土した。

彫器

22は、２～４と同様な基部加工ナイフ形石器を転用して、その先端部に刃部をつくった彫器である。先端部の側縁に細かい調整を加え、それを打面として２面ほどファシットを入れて仕上げた彫器である。

23は、白色玉髄の石刃を素材とする彫器である。石刃打面を折り取り、先端部側縁に細かい調整を加え、もう一方の側縁にファシットを入れている。基部にはわずかな調整をおこない、直線的に尖らした端部としている。

24は、凝灰質頁岩製の大形剥片を素材として、先端側

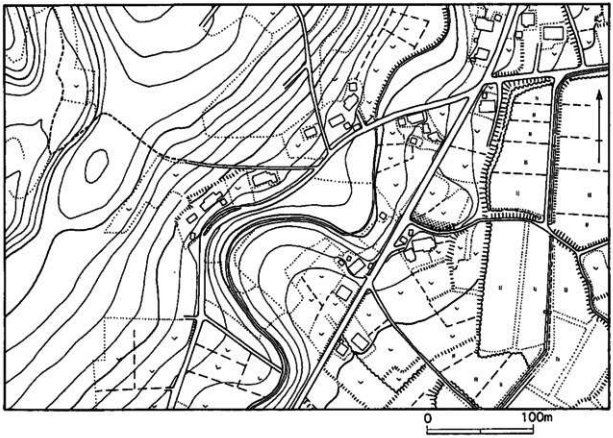


図9　VI区調査位置

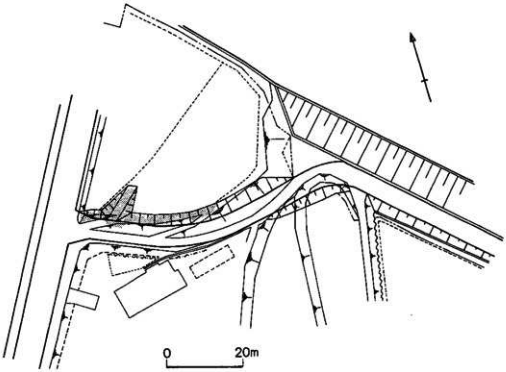


図10　VI区の工事箇所と調査位置（ドット部：発掘場所）

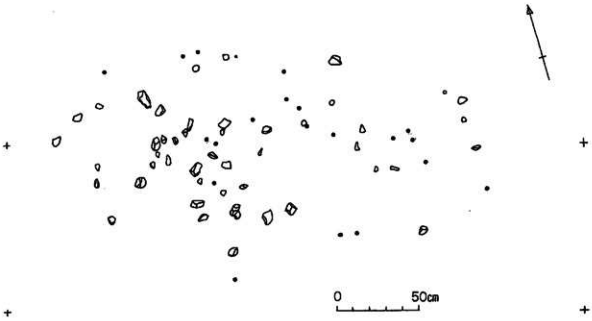


図11　VI区旧石器時代の２号礫群　・：石器

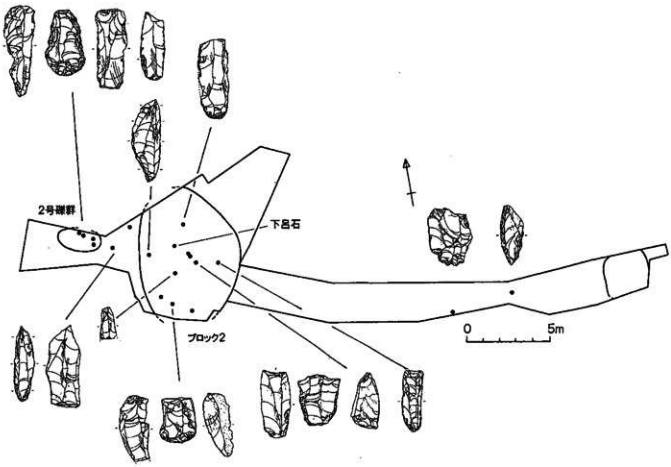


図12　VI区の主な遺物分布図

の片面に調整をおこない、それを打面としてもう1面に面的な調整のファシットを5回ほど入れて平らな刃部としている。側縁の一部と基部側には、器形を整える調整がおこなわれている。

25は、珪質頁岩製の彫器である。厚手の剥片を素材として、末端側の側縁に調整をおこない、そこを打面としてもう1方の側縁に複数回ファシットが入れられている。

26は、珪質頁岩製の彫器である。剥片の末端部に大きな剥離がおこなわれ、それを打面として背面側に面的に5回ファシットが入れられている。反対側の打面部にも、5回以上の調整が加えられて鋸歯縁状を呈しており、ファシットと考えたが、基部加工である可能性もある。発掘区の東よりの地点より単独で出土した。

掻器

27は、黒曜石製の掻器である。厚めの幅広剥片を素材として、側縁から末端部にかけて弧状の刃部がつくられている。

28は、黒曜石製のやや厚めの石刃を素材とする掻器である。打面部を刃部として、両側縁にも連続して加工がおこなわれている。

29・30は、黒曜石製の石刃を素材として末端に刃部がつくられた掻器である。29は、1側縁の中央付近に主剥離面側に面的に深い剥離が入れられている。打面部は欠損する。

31・32は、黒曜石製の石刃の末端部と側縁の一部にやや角ばった形状の刃部がつくられた掻器である。打面側は欠損する。32は、刃部付近の欠損品であり、受熱石器で、表面はくすんでいる。

抉入掻器

33は、白色玉髄製の石刃を素材とする抉入掻器である。石刃の末端部に緩く湾入する刃部がつくられている。基部の両側縁には刃潰し加工がおこなわれている。ナイフ形石器の可能性もある。

削器

34は、黒曜石製の石刃を素材とする削器である。末端側の1側縁に加工がおこなわれている。それ以外の側縁には微細剥離痕がみられる。

石刃

35～38は、黒曜石製の石刃であり、側縁にはまばらに微細剥離痕がみられる。

39・40は、黒曜石製の小形の石刃である。

41は、玉髄製のやや厚手の石刃である。打面部を欠損する。

これ以外の出土品

無斑晶質安山岩製の剥片類（写真図版19－46）が多く出土したが、製品は少なかった。次いで多いのは黒曜石の剥片類（写真図版18－44）である。このほかの石材では、凝灰質頁岩（写真図版19－47）とチャート（写真図版19－45）の遺物が少し出土した。凝灰質頁岩は、直径8～9㎝ほどの円礫から剥がされた幅広の剥片と石核からなる。チャートは、暗赤褐色の厚さ4㎝で長さ5㎝以上の亜円礫から剥がした幅広剥片や縦長剥片と石核からなる。いずれの石材にも製品はみられない。

3　縄文時代の遺物

縄文土器は、早期の絡条体圧痕文土器、前期中葉の黒浜式併行の土器、そして中期初頭の梨久保式併行の土器などがみられる（写真図版24－56）。

縄文時代の石器としては、磨石9点、特殊磨石1点、凹石2点が得られている。このうち、磨石3点と特殊磨石1点は砂岩製であり、それ以外のものは粗粒な斑晶を含む安山岩製である。

表2　七ッ栗遺跡出土の石器一覧表

No.	名　称	遺物番号	地　層	石　材	長さ㎜	幅㎜	厚さ㎜	重量g	備　考
1	ナイフ形石器	93NN F11-54	上Ⅱ中部	黒曜石	52.5	16.6	6.0	4.0	
2	ナイフ形石器	93NN I7-23	上Ⅱ上部	珪質凝灰質頁岩	30.8	20.9	8.1	3.9	
3	ナイフ形石器	93NN G8-5	柏原上部	黒曜石	30.6	19.8	7.8	4.5	
4	削器	93NN E12-5	柏原	黒曜石	34.7	13.9	6.0	2.5	
5	彫器	93NN F11-49	上Ⅱ中部	玉髄	56.7	35.8	21.9	39.7	
6	彫器	93NN F12-7	上Ⅱ下部	珪質凝灰質頁岩	87.1	27.0	11.7	31.6	
7	彫－掻器	93NN F11-95	上Ⅱ中部	黒曜石	44.0	25.3	16.2	16.9	
8	彫器	93NN E12-4	柏原下部	玉髄	51.1	32.3	10.9	15.7	
9	彫－削器	93NN I7-18	柏原下部	黒曜石	50.0	24.0	6.8	6.5	
10	微細剥離石刃	93NN F11-65	上Ⅱ中部	黒曜石	55.2	20.6	11.8	7.5	
11	微細剥離石刃	93NN F11-116	上Ⅱ中部	黒曜石	67.4	16.0	8.2	7.8	
12	微細剥離石刃	93NN F11-50	モヤ下部	黒曜石	52.3	32.0	13.4	21.7	
13	石刃	93NN F11-62	上Ⅱ中部	珪質凝灰岩	44.5	12.9	5.0	2.4	
14	石刃	93NN F11-94	上Ⅱ中部	玉髄化した珪質頁岩	37.8	13.8	4.0	1.5	
15	石刃	93NN F11-37	柏原下部	黒曜石	35.1	17.5	9.4	3.9	
16	剥片	93NN G10-8	柏原下部	黒曜石	20.2	22.8	8.4	3.0	
17	ナイフ形石器	96NN -360	上Ⅱ中部	黒曜石	61.8	20.8	8.6	9.2	
18	ナイフ形石器	96NN -538	上Ⅱ中部	黒曜石	35.1	21.8	6.8	4.8	
19	ナイフ形石器	96NN -578	上Ⅱ上部	黒曜石	45.1	16.7	5.5	3.4	
20	ナイフ形石器	96NN -177	上Ⅱ上部	黒曜石	45.8	14.6	6.3	4.7	
21	ナイフ形石器	96NN -570	耕土下底	無斑晶質安山岩	44.4	17.9	8.4	6.0	
22	彫器	96NN -419	耕土	黒曜石	56.4	15.6	6.8	5.5	
23	彫器	96NN -510	耕土	白色玉髄	62.1	25.8	10.7	10.3	
24	彫器	96NN	―	凝灰質頁岩	74.4	44.0	21.6	67.9	
25	彫器	96NN -257	上Ⅱ上部	珪質頁岩	41.5	20.6	13.1	13.5	
26	彫器	96NN -23	耕土下底	珪質頁岩	43.1	32.2	14.1	17.1	
27	掻器	96NN -553	上Ⅱ中部	黒曜石	63.2	38.8	15.8	30.4	
28	掻器	96NN -443	耕土	黒曜石	49.2	30.2	9.8	15.0	
29	掻器	96NN -342	耕土	黒曜石	60.1	23.3	9.3	13.3	
30	掻器	96NN -523	耕土	黒曜石	34.9	28.2	7.8	8.6	
31	掻器	96NN -594	モヤ	黒曜石	43.3	27.8	7.3	10.5	
32	掻器	96NN -401	上Ⅱ上部	黒曜石	37.9	31.6	9.2	9.5	
33	抉入掻器	96NN -303	上Ⅱ上部	白色玉髄	50.8	22.3	8.0	10.0	
34	削器	96NN -424	上Ⅱ上部	黒曜石	50.6	18.1	6.8	5.8	
35	微細剥離石刃	96NN -432	上Ⅱ上部	黒曜石	59.6	24.4	8.8	8.8	
36	微細剥離石刃	96NN -458	上Ⅱ上部	黒曜石	68.2	23.5	11.2	11.5	
37	微細剥離石刃	96NN -496	モヤ下部	黒曜石	49.3	21.8	7.6	5.6	
38	微細剥離石刃	96NN -521	モヤ上部	黒曜石	48.7	19.5	9.0	6.5	
39	石刃	96NN -286	耕土	黒曜石	24.0	12.3	4.4	1.1	
40	石刃	96NN	―	黒曜石	26.3	6.5	2.8	0.4	
41	石刃	96NN	―	玉髄	39.9	17.3	8.2	5.4	
42	局部磨製石斧	94NN K2-2	モヤ上部	酸性凝灰岩	173.5	41.5	22.5	173.6	
43	局部磨製石斧	94NN K2-1	モヤ上部	酸性凝灰岩	166.0	52.6	26.0	234.6	
44	石鏃	93NN F10-2	柏原上部	珪質凝灰岩	14.7	11.7	3.0	0.4	
45	石鏃	93NN I5-39	柏原中部	無斑晶質安山岩	15.2	12.6	3.4	0.5	
46	石鏃	93NN G10-34	柏原下部	黒曜石	19.6	10.3	3.5	0.6	
47	抉入削器	93NN G8-32	柏原下部	黒曜石	36.4	27.0	11.1	7.2	
48	削器	93NN H8-25	柏原下部	チャート	35.7	36.5	10.4	8.4	
49	石匙	93NN H7-20	柏原上部	無斑晶質安山岩	36.0	50.1	4.9	8.0	
50	石匙	93NN H7-11	柏原下部	珪質頁岩	24.0	16.0	5.9	2.0	
51	石錐	93NN I6-34	柏原上部	珪質凝灰岩	46.8	13.2	6.6	3.6	
52	磨製石斧	93NN H8-8	柏原上部	蛇紋岩	59.6	57.0	21.4	98.1	
53	特殊磨石	93NN	―	砂岩	85.8	98.7	62.4	348.0	
54	磨石	93NN	―	輝石安山岩	100.3	87.6	45.3	583.2	
55	回石	93NN	―	輝石安山岩	70.4	74.9	33.5	177.5	
56	石皿	93NN H9-9	柏原下部	輝石安山岩	63.9	85.1	13.1	49.4	
57	石皿	93NN H8-17	柏原下部	輝石安山岩	67.2	77.5	29.3	166.3	
58	石皿	93NN G11-5	柏原下部	輝石安山岩	75.7	103.7	30.9	333.5	
59	石皿	93NN G11-4	柏原下部	板状粘砂岩	87.6	109.6	28.2	213.3	
60	剥片	96NN -352	耕土	下呂石	15.2	13.6	8.4	1.0	

表3　七ッ梁遺跡出土の縄文土器一覧（1）

No.	時期	文様・文様要素		胎土 量	胎土 砂粒の種類	繊維混入量	遺物番号	備考
1	早期・前半	撚糸文	無節縄文	有	赤、白、qt、ho、mg		93NN・I6-26	口縁部
2	〃	撚糸文		多	〃		93NN・H6-12	〃
3	〃	押型文	複合山形文	たいへん多	qt>白、赤、ho		93NN・G10-18	
4	早期・末	条痕文	刺突文	有	灰、白、赤、ho、qt	多	93NN・G11-6	
5	〃	絡条体圧痕文		やや多	qt、白、赤、ho		93NN・G11-1	
6	〃	縄文		少	白、灰、qt	多	93NN・H6-3	口縁部
7	〃	条痕文		有	灰、白、qt、bt、レキ	〃	93NN・H6-5	
8	〃	〃		〃	長石、qt、白、レキ	〃	93NN・H9-15	
9	〃	〃		やや多	qt、ho、白	〃	93NN・I6-39	
10	前期（関山式）	平行沈線文	貼付文	有	qt、ho、mg、sc、レキ		93NN・G10-15、16	口縁部
11	前期・前半（黒浜式）	波状文		〃	ho、sc、qt、px	少	93NN・H7-16、26	〃
12	〃	〃	地文・縄文	〃	〃	〃	93NN・I5-3	11、12は同一個体
13	〃	〃		やや多	ho、sc、px、qt、レキ	有	93NN・I5-2、4 93NN・I5-28	口縁部
14	〃	〃		有	qt、ho、px、sc	〃	93NN・I7-21	〃
15	〃	平行沈線文		〃	灰、白、ho、sc、qt、レキ	〃	93NN・F11-40	〃
16	〃	〃		やや多	qt、白、bt、ho、レキ	〃	93NN・F12-9	
17	〃	〃		多	白>qt、mg、sc	多	93NN・J4-7	
18	〃	〃		たいへん多	ho>px、fl、sc	少	93NN・G9-11	
19	〃	〃		有	ho、bt、qt、sc	〃	93NN・G10-21	
20	〃	〃	地文・縄文	〃	灰、白、sc、bt、ho	〃	93NN・I8-1	
21	〃	〃	地文・無文	やや多	白、sc、qt、ho、レキ	多	93NN・H8-28	
22	〃	〃		少	白、灰、qt、レキ	少	93NN・I5-32	
23	〃	コンパス文	斜に爪形文	やや多	sc>灰、px	有	93NN・G9-4、5	口縁部
24	〃	〃	〃	〃	〃	〃	93NN・G8-15	〃
25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	93NN・G8-45	〃
26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	93NN・G8-47	
27	〃	〃		たいへん多	sc、qt、ho、白、px、レキ	少	93NN・H8-35	〃
28	〃	〃		多	白、灰、fl、ho、qt	有	93NN・E12-3	〃
29	〃	〃		〃	qt、sc、ho、px、レキ	〃	93NN・H8-23	
30	〃	〃		たいへん多	sc、qt、ho、白、px、レキ	少	93NN・G9-19	
31	〃	〃		〃	〃	有	93NN・I8-2	
32	〃	〃		〃	〃	〃	93NN・H9-6	
33	〃	〃		〃	〃	少	93NN・H8-26	
34	〃	〃		少	白、sc、px	〃	93NN・G8-44	
35	〃	羽状縄文		有	白、qt、sc、ho	有	93NN・G8-17、18、19、21、22、23、36、38、39、40 93NN・G9-7、97	
36	〃	〃		〃	sc、ho、qt、白、px	少	93NN・I5-10	
37	〃	〃		やや多	ho、px、mg、白、sc、qt	〃	93NN・I5-8、23	
38	〃	〃		〃	sc、qt、ho	〃	93NN・I5-16、18	
39	〃	〃		有	ho、sc、qt	〃	93NN・I5-24	
40	〃	〃		〃	ho、sc、qt、レキ	〃	93NN・I5-15	
41	〃	〃		〃	ho、sc、qt、白	〃	93NN・J5-8	
42	〃	〃		〃	qt、ho、sc、白、灰、レキ	有	93NN・G10-9	
43	〃	〃		〃	ho、sc、白、qt、レキ	〃	93NN・I5-45	
44	〃	〃		〃	白、ho、sc、灰	少	93NN・I5-44	
45	〃	〃		〃	sc、ho、qt、レキ	〃	93NN・I6-18、19、43	
46	〃	〃		〃	白、ho、sc、レキ	〃	93NN・I6-29	
47	〃	〃		〃	白、sc、qt、ho	〃	93NN・I5-21	
48	〃	〃		多	sc、白、qt、ho、レキ	〃	93NN・G9-31	
49	〃	〃		有	ho、mg、白、sc	少	93NN・I5-42	
50	〃	〃		多	白≫ho、px	多	93NN・I6-35	
51	〃	〃		〃	〃	〃	93NN・I7-15	底部、50、51は同一個体

表4　七ッ栗遺跡出土の縄文土器一覧（2）

No.	時期	文様・文様要素		胎土 量	胎土 砂粒の種類	繊維混入量	遺物番号	備考
52	前期・孤浜			有	ho、qt、sc、レキ	少	93NN・J5-10	
53	〃	羽状縄文		やや多	レキ(ch、白、赤)>qt、ho	多	93NN・F10-40	
54	〃	縄文		有	白、ho、mg	〃	93NN・I7-6	底部
55	〃	沈線文	盡下隆帯	多	qt、赤、白、ho、レキ	〃	93NN・G8-11、12、14、31、41 93NN・G9-9、10、13、14、22、27、37、45	
56	〃	〃		やや多	ho、qt、白、sc	〃	93NN・G10-28、29	口縁部
57	前期・後半(諸磯a式)	平行沈線文・肋骨文	円形竹管の刺突文	有	白、ho、sc、レキ		93NN・I6-20、45、46、47	
58	前期・後半(諸磯c式)	平行沈線文		〃	白、赤、ho、灰		93NN・G10-24	
59	〃	〃		〃	〃		93NN・G11-7	58、59は同一個体
60	中期(梨久保式)	平行沈線文	矢羽根状文 爪形文	やや多	白、qt、赤、mg、ho		93NN・F9-3 93NN・I6-7	
61	〃	〃		たいへん多	qt、ho>mg、赤		93NN・G9-23、24、38	
62	前期諸磯c	平行沈線文		有	白>赤、灰		93NN・G11-23	
63	中期(梨久保式)	平行沈線文		多	qt、白、赤、灰、mg		93NN・H8-30	
64	〃	〃		〃	白、qt>ho、レキ		93NN・G9-15	
65	〃	〃		〃	白、qt、赤、mg		93NN・H8-34	
66	前期(諸磯a)		爪形文	有	レキ(白)、qt		94NN・Ⅲ-A-7	
67	〃		〃	多	レキ(白)、ho、qt		94NN・Ⅱ-T-9-34	口縁部
68	〃	平行沈線文・肋骨文	円形竹管の刺突文	有	白、ho、qt、sc		94NN・Ⅱ-T-9-24	
69	〃	〃	〃 地文・縄文	少	sc、ho、px、qt		94NN・Ⅱ-S-8-15	
70	〃	〃	円形竹管の刺突文	たいへん多	px (hy)、白、ho、sc		94NN・Ⅱ-S-9-14	
71	〃	平行沈線文		やや多	px(hy)、ho、sc、白		94NN・Ⅱ-S-10-24	口縁部
72	〃	〃	爪形文	〃	白、ho、qt、sc		94NN・Ⅱ-T-8-25	〃
73	〃	〃	刺突文	有	px、ho、白、sc、qt		94NN・Ⅱ-S-9-118、119	〃
74	〃	縄文		〃	sc、qt、ho、レキ		94NN・Ⅱ-S-9-122	〃
75	〃	〃		やや多	sc、qt、ho、白、レキ		94NN・Ⅱ-R-10-16	
76	〃	〃		有	ho、白、qt、sc、レキ		94NN・Ⅱ-R-10-19	
77	〃	〃		多～やや多	ho、白、qt、sc、レキ		94NN・Ⅱ-T-8-19、20	
78	〃	〃		やや多	qt、灰、白、レキ		94NN・Ⅱ-T-7-17	口縁部
79	〃	〃		有	白、赤、ho、qt		94NN・Ⅱ-S-9-121	
80	〃	〃		〃	白>赤、ho、qt		94NN・Ⅱ-S-9-18	
81	〃	〃		やや多	px、ho、qt、白、赤、レキ		94NN・Ⅱ-S-9-37	
82	〃	〃		有～やや多	qt、白、ho、mg、レキ		94NN・Ⅱ-S-9-19	
83	〃	〃		たいへん多	px、mg、sc		94NN・Ⅱ-S-8-13、14	
84	〃	〃		有	白>px、sc、qt		94NN・Ⅱ-R-10-18	
85	〃	〃		やや多	白、qt、sc、ho、px、レキ		94NN・Ⅱ-S-9-85	
86	〃	結節縄文		〃	レキ(白、ch)>px、ho		94NN・Ⅱ-T-8-6	口縁部
87	〃	〃		少	qt、ho、mg、レキ		94NN・Ⅱ-S-9-81	
88	〃	無節縄文		有	px、qt、mg、白、sc		94NN・Ⅱ-T-7-16	
89	〃	複節縄文		〃	白、sc、bt、ho、赤		94NN・Ⅱ-S-9-30、34	
90	中期(梨久保)	ヘラ切り沈線文		やや多	qt>白、ho		93NN・H7-7	口縁部
91	〃	平行沈線文		多	qt>赤、ho		93NN・H7-10	〃
92	〃	ソーメン状浮線文		やや多	qt>ho、mg		93NN・H7-5	〃

(注) 砂粒の記号
qt 石英、ho 角閃石、px 輝石類、hy シソ輝石、bt 黒雲母、mg 磁鉄鉱、fl 長石類、白 白色岩片、赤 赤色岩片、灰 灰色岩片、茶 茶色岩片、黒 黒色岩片、ch チャート、レキ 礫を含む

砂粒の量　多い順に区分　たいへん多い>多い>やや多い>有>少ない

Ⅵ　七ッ栗遺跡出土の局部磨製石斧

1　石器の出土状況　図13～15

2点の局部磨製石斧はⅣ区K2グリッドからの出土である。Ⅳ区では1年目の平成5年度に試掘調査をおこなったが、その折に吉川酉氏宅の横に設定した試掘溝より2点の石斧が出土した。次年度に本調査をおこなう場所だったので、出土位置の保存をはかり埋め戻した。平成6年度は、現道から拡張する道路幅の敷地の表土を重機で剥いだ後、遺構確認をおこなって、前年の試掘溝の復元をおこなった。実際には、試掘溝は道路幅を東側に外れた位置にあった。

Ⅳ区の周辺には、近世以降と推定される柱穴、ピットが5基検出されたほかは、遺構は確認できなかった。遺物もまったくなく、約2.3m北西方の同層準に約10cmの亜角礫1点があっただけである。

試掘溝部分の東壁面では、上位より18cmの埋土（ローム混じりの土）、22～26cmの真っ黒な色調の柏原黒色火山灰層上部、8～13cmの若干黒味の少ない柏原黒色火山灰層下部、2～6cmの黒褐色シルト質風化火山灰層のモヤ上部、1～11cmの灰褐色シルト質風化火山灰層のモヤ下部、3～18cmの灰褐色シルト質風化火山灰層の上Ⅱ上部という層位で、最下部には13cm＋の上部野尻湖層相当の水成層がみられた。

石斧の出土層位は、上部野尻ローム層Ⅱ最上部のモヤ上部の下面から下半部の層準である。モヤ層準は、上位の黒色火山灰層と下位の風化火山灰層（いわゆるローム層）の2つの層相が漸移する層準で、不規則な地層境界が観察される。この壁面では比較的安定した境界で上下に2層を色調で区分できた。石斧周辺のモヤ層準には、2タイプの撹乱層がみられた。南側にはやわらかい黒色火山灰土が充填する撹乱部があり、石斧直下と近くには黒褐色砂質土が充填する楕円形の撹乱部がみられた。この後者の撹乱部の成因を調べる目的で、石斧出土地の記載・撮影終了後、工事範囲外の民地をさらに約25cm拡張させていただき精査したところ、石斧№42の下の撹乱部はほぼ東西方向にやや屈曲したパイプ状に延びており、形状からは木の根またはモグラ等の動物の生物擾乱と判断した。なお、石斧42周辺の地層はパイプ状の撹乱部以外には乱れた痕跡が認められなかったので、石斧は地中では二次的な移動を被むっていないと思われる。

出土状況は43(K2-1)が上に42(K2-2)が下になって若干重なるように出土しているが、土坑等は確認されていない。43は刃部を東に向け、実測図のA面を表にして、42は刃部を東南東に向け、実測図のA面を表にして、2つの石器の基部が重なって出土している。この出土状況から2点の局部磨製石斧は同時期の所産であると考えられる。

2　石器の記載　石器図版8・9

記載にあたり実測図左正面をA面、右正面をB面とする。42(K2-2)は最大長17.35cm、最大幅4.15cm、最大厚2.25cm、重量173.6g、石材は酸性凝灰岩製である。A面の末端に基端長軸方向からの一次剥離痕を残し、剥片素材であることが分かる。両面ともに粗い剥離を行った後に階段状の細かい剥離を行い、全体形を成形している。刃部は若干傾くが概ね弧状を呈し、両面ともに丁寧に成形されている。研磨面はA面で最大1.4cm、B面で最大1.6cm程、長軸に平行して磨かれている。研磨の大部分は剥離によって全体形の成形が行われた後に行われているが、B面先端部右側縁に研磨後の剥離痕が残るが使用によるものか再調整によるものか判断できない。これを使用痕と見なせばある程度実用された石斧であると考えられ、さらに刃部が若干傾くことから刃部の再生がおこなわれていた可能性もある。断面は不整両凸レンズ状の形状である。最終的な全体形は幅が狭く、長細く両側縁が並行した長楕円形である。刃部の形状から片刃石斧で平鑿形に分類される。また、いわゆる「神子柴型石斧」（森嶋1968・1970）の範疇で理解される石器である。

43(K2-1)は最大長16.60cm、最大幅5.26cm、最大厚2.60cm、重量234.6g、石材は酸性凝灰岩製である。全体の風化が著しい。B面の器体中央に一次剥離痕を残すことにより、大形の剥片が素材であると判断される。42と同様に粗い成形調整後に階段状の剥離によって両面を成形している。刃部は弧状を呈し、両面ともに長軸方向から

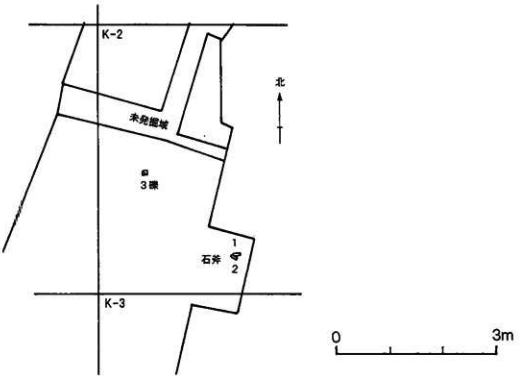


図13　Ⅳ区　石斧出土位置

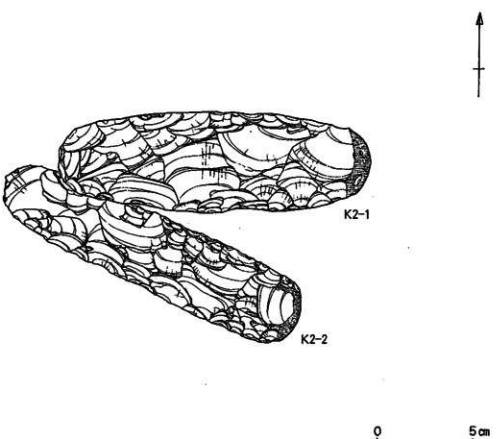


図14　局部磨製石斧の出土状態　K2-1：43、K2-2：42

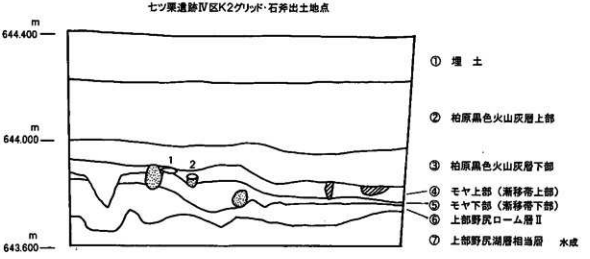


図15 石斧出土地点の地質（グリッド東壁のスケッチ） 写真図版1、10に写真掲載

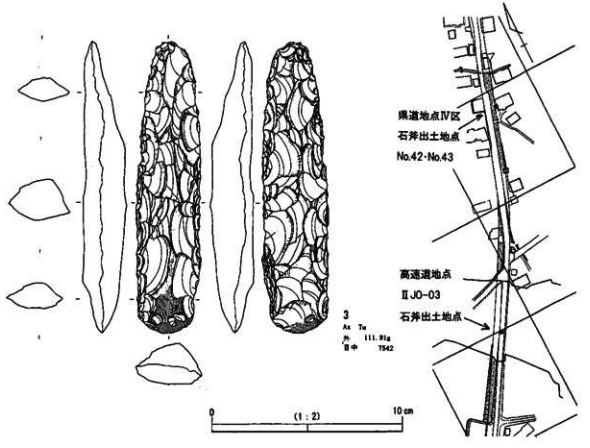


図16 七ッ梁遺跡高速道地点出土の局部磨製石斧 土屋・谷編（2000）より引用

の研磨が行われている。研磨はA面で最大1.1㎝、B面で1.15㎝程度である。調整剥離は研磨に先行して行われている。断面は不整両凸レンズ状の形状である。最終的な平面形態は幅が42に比べて若干幅広く、両側縁が並行する長楕円形である。側面形の観察から若干縁部がB面側によることから、一応、片刃石斧で平盤形の範疇で捉えられ、さらに「神子柴型石斧」に分類される。

3　出土状況からみた遺跡の性格

2点の局部磨製石斧は出土状況から明確な遺構こそ確認されなかったが、重なって出土した状況は2点の同時性を表すとともに、明確な意図を持って同一形態の石器が埋納された可能性が高い。このような出土状況は「デポ」と呼ばれる遺構・遺跡として扱われる(佐原1985、田中1995・2001)。この概念を適用すれば、「デポ」遺構として2点の局部磨製石斧の出土状況を捉えることができる。明確な掘り方は確認できなかったが、土坑内に埋納されていた可能性もある。この出土状況の例は神子柴石器群を出す遺跡に多く見られ、標式的な遺跡である長野県神子柴遺跡（藤沢・林1961）、唐沢B遺跡（森嶋ほか編1998）など多数の完形の石斧と尖頭器、スクレイパー類が同時に出土する例などが知られている。少数の完形石斧のみがまとまって出土する例としては長野県宮ノ入遺跡（森嶋1968、大竹2003）、山形県日向洞窟遺跡西地区（佐川・鈴木編2006）、東京都多摩ニュータウン№796遺跡（丹野編1999）、岩手県持川遺跡（鈴木・鎌田1971）などで確認されている。また、近隣の高速道に伴う七ッ栗遺跡の調査では、単独で完形の局部磨製石斧が1点出土（図16）しており（土屋・谷編2000）、単独でのデポの可能性もある。後述される野尻湖周辺の単独で出土する局部磨製石斧はこの可能性を含んでいると考える。

これらを勘案すると、七ッ栗遺跡の2点の局部磨製石斧は、おそらく埋納されたものと考えられ、当概期の人類活動を考える上で重要な例である。

4　石器の時期的位置づけ

前述した局部磨製石斧の出土層位は上部野尻ローム層Ⅱ最上部のモヤ上部の下面から下半部の層準である。モヤ層準は後期旧石器時代終末から縄文時代草創期の遺構・遺物が出土する層位であり、モヤ下底に細石刃石器群、モヤ下部・上部境界に隆線文土器、モヤ上部に爪形文土器が出土している（野尻湖人類考古グループ1994）。野尻湖遺跡群では野尻湖発掘調査団による仲町遺跡（Ⅱ区風成層）の調査で縄文時代草創期の隆線文土器（野尻湖人類考古グループ1987）が出土している。また、県埋蔵文化財センター調査の共通層序のⅢ層にあたり、基準となるのは星光山荘B遺跡出土資料である（土屋・中島編2000）。Ⅱ層下面～Ⅲ層中に縄文時代草創期の隆線文土器に尖頭器・有舌尖頭器・石錐・掻器・削器・局部磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石・砥石・石斧調整剥片・石核・剥片類などがまとまりを持って出土している。これは層位的にも分布的にも、一括性の高い状況で出土しており、当該期の野尻湖周辺の基準資料となりうる内容を持っている。この隆線文に伴う局部磨製石斧（一部、打製石斧を含む）の一群は、18点出土し接合により16個体となる。調整剥片が43点出土していることから、遺跡内で多少の刃部の再生など石器の微調整が行われていたようである。

次に七ッ栗遺跡の時期的位置づけを行うために、長野県北部の一括性の高い局部磨製石斧の一群（唐沢B遺跡、宮ノ入遺跡、星光山荘B遺跡）と七ッ栗遺跡出土資料（高速道地点の1点を含む）を対比し特徴を抽出してみる(図17)。長さは唐沢B遺跡では概ね20㎝を超す大きさである。幅も6～8㎝と明らかに大きさの点で異なる。長大で幅広な石斧である。対して、宮ノ入遺跡の30㎝を超える1点の大形石斧を除き、星光山荘B遺跡、七ッ栗遺跡、宮ノ入遺跡の石斧の長さは15～20㎝に収まり、幅は2～4㎝程度のものが多く、相対的に幅が狭く長細い石斧である。また、石斧の機能にとって重要なファクターである重量は、唐沢B遺跡出土石斧では小形の2点を除き400～1,000ｇの範囲でばらつきがあるが大形品が多い。対して、重量の分かる、星光山荘B遺跡・七ッ栗遺跡（宮ノ入遺跡例は重量が大形石斧を除き不明である）では中・小形の100～300ｇに集中し、斉一性が高い。七ッ栗遺跡・宮ノ入遺跡・星光山荘B遺跡例は形状的にも重量的にも類似しており、同じグループに属すると考えられる。よって、七ッ栗遺跡出土石斧の編年的な位置付けは、前述した層位的な状況と合わせて、石斧の形状も土

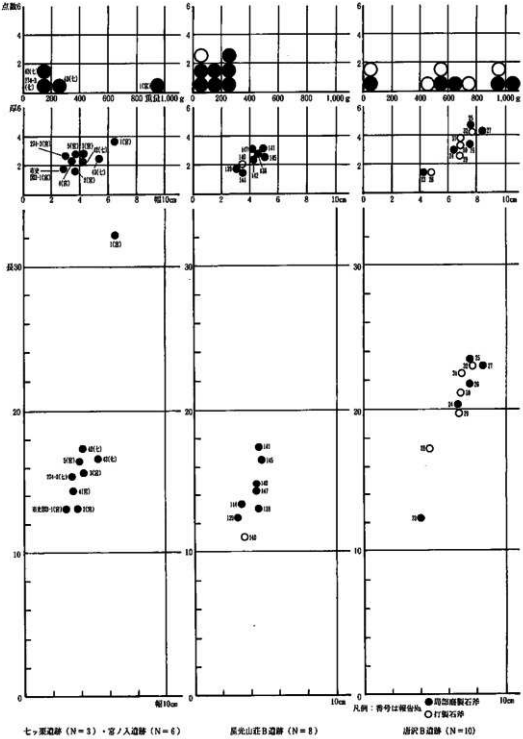


図17　神子柴型石斧の長幅・厚幅・重量分布図

器を持つ星光山荘B遺跡と同様と考えられ、縄文時代草創期の隆線文土器段階に相当する可能性が高い（注1）。近隣の新潟県域では小瀬が沢洞窟と様相が類似する（前山1993）。森嶋稔氏が神子柴型石斧の変遷を述べる中で示したように、新しくなるほど「狭長化」するという石斧の形態変化を考えても（森嶋1970）、明らかに唐沢B遺跡よりも新期の様相と考えられる。このような傾向は近隣の新潟県域でも看取される（立木2004）。

今回は雑駁な分析に終始したが、後述される神子柴型石斧の石材の問題やデポの位置づけ、関連する周辺地域との対比など課題が多い。今後も継続して究明したい。

（注1）　七ッ栗遺跡出土石斧と星光山荘B遺跡の形態的な類似性は、橋爪潤氏によってすでに述べられている（橋詰2004）。

Ⅶ　野尻湖周辺の神子柴系石器群の石材

1　野尻湖遺跡群における神子柴系石器文化の遺跡

長野県最北端の信濃町野尻湖周辺には、多くの旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡が分布するが、神子柴系の石器文化に属する遺跡も集中していることは、森嶋稔（1968）の指摘以来、多くの研究者の注目するところとなっている。野尻湖周辺が神子柴系石器群の集中地点の１つといっても過言はないであろう。研究の初期段階に知られ有名になっている割には、発掘調査がおこなわれた遺跡はあまりなく、表採等の単独出土の石器が多いため、その後、研究の進展はあまりみられなかった。

この10数年の高速道やアクセス道路、公共事業等の発掘調査でも、星光山荘Ｂ遺跡でまとまった石器群が出土したほかは、単独での出土例が多かった。森嶋（1968）以降、信濃町の神子柴系石器群をまとめて記述したものはあまりなかったが、その後、横詰（2004）が野尻湖周辺における神子柴石器群の紹介をおこなっている。これらの石器の多くは、長年の野尻湖畔やその周辺で採集、調査されてきた歴史を有し、多くの方々の手を経てきた資料である。その調査履歴を記録しておくことは重要であるので、ここに付記する。

野尻湖周辺で、神子柴系石器群が確認されている遺跡は、次のとおりである。

野尻湖畔にある遺跡：立が鼻遺跡、砂間遺跡、海端遺跡、杉久保遺跡

丘陵上にある遺跡：小丸山遺跡、仲町遺跡、狐久保遺跡、貰ノ木遺跡、上ノ原遺跡、東裏遺跡、大平遺跡、七ッ栗遺跡、星光山荘Ｂ遺跡

これらのうち、表面採集等で得られている遺跡は、立が鼻遺跡、砂間遺跡、海端遺跡、小丸山遺跡などである。高速道関連などの発掘調査では、七ッ栗遺跡・大平遺跡（土屋・谷編2000）、東裏遺跡（土屋・谷編2000）、星光山荘Ｂ遺跡（土屋・中島編2000）、仲町遺跡（鶴田ほか編2004）などに神子柴型石斧が出土している。その他の発掘で、杉久保遺跡（森嶋1968；中村2004）、上ノ原遺跡第１次調査（中村1992）などがある。

2　野尻湖周辺の神子柴系石器群の石器の来歴　写真図版５・６

表面採集等で得られている神子柴系石器群の多くのものはこれまでに石器の所在が再確認され、野尻湖ナウマンゾウ博物館所蔵の神子柴系石器コレクション（注１）となっている。これらの石器は研究当初の基準的な資料となっていたが、その発見・調査の経緯について、これまで十分な記録が残されていなかった。一部には所在遺跡名の混乱が生じており（注２）、それを訂正する意味でそれぞれの石器の来歴について以下に述べる。

立が鼻遺跡（Ａ）

ナウマンゾウ化石に伴う「野尻湖文化」の発掘がおこなわれている立が鼻遺跡の北部に位置し、遊覧船白鳥丸の桟橋から藤屋旅館前あたりに、神子柴型石斧をはじめとする石器、剥片等が採集されている。森嶋（1976）は立が鼻Ｂ遺跡としていた。

Ａは、吉松雄一氏より1984年６月25日に野尻湖博物館に寄贈された石器である。森嶋（1968）で記載されて以来、多くの文献であつかわれている。

立が鼻遺跡では、もう１点、加藤松之助氏により神子柴型石斧が採集されていて、1975年ごろには存在していたが、その後、現時点では方行がわからなくなっている。この石器の外形のみは、森嶋（1970）の神子柴型石斧の集成図に記録されている。

小丸山遺跡（Ｂ）

野尻新町の西方に国道18号線のトンネルがあるが、その南側につづく半島状の丘陵先端部付近に道が作られた頃、吉松雄一氏、池田隆氏が発見したものである。森嶋（1968）に記載されており、本文は正しいが、付図（第３図－２）に実測図が掲載されているが、説明の遺跡名がまちがって印刷されている。この間違いは、1993年４月15日に吉松雄一氏より指摘をうけた。

なお、森嶋（1968）では、小丸山を信濃町柏原にある小丸山公園としているが、これは誤りである。

砂間遺跡（Ｃ）

野尻湖南岸の富濃砂間の湖底に位置する。発掘はされたことがないが、池田寅之助氏、吉松雄一氏、芹沢長介

氏らにより、表面採集により石器がえられている。池田寅之助氏により採集され、1984年6月22日に夫人の池田秀野さんより野尻湖博物館に寄贈された。Cは、神子柴型石斧である。森嶋（1968）では、記載は正しいが、付図（第3図-3）の説明の遺跡名は誤りである。C(7-1)は、神子柴型尖頭器である。森山（1986）ではじめて外形の記載をおこなっているが、この中で狐久保遺跡としているのは間違いである。森嶋（1988）では、砂間遺跡として、実測図を掲載している。

上ノ原遺跡第1次調査（D）

信濃町柏原上ノ原の北部高校信濃町分校跡地を畑地とするために開墾作業がおこなわれ、そのための試掘調査で遺跡の存在が確認された。1990年6～8月の発掘調査で、東西方向にならぶ5基の石囲い炉の中から3片に割れて出土したものである。石囲い炉とまわりの石器群は、細石刃文化のものであり、接合関係等からこの石斧も遺構との同時性が強いと考えられている（中村1992）。この局部磨製石斧が細石刃文化期のものかどうか、遺構やまわりの遺物との共伴性については議論があるが、結論は出ていない。Dは、酸性凝灰岩製の局部磨製石斧である。

狐久保遺跡（E）

信濃町野尻狐久保の山際にある遺跡で、1960年代に吉松雄一氏が欠損した神子柴型石斧を採集した。1965年11月には、小林孚氏が担当者となって発掘調査が町道の建設に伴い信濃町教育委員会によりおこなわれた。

Eは、1984年6月25日に吉松雄一氏から野尻湖博物館に寄贈された神子柴型石斧である。

海端遺跡（F）

1987年4月14日午前中、野尻湖観光協会など地域住民主催により、野尻湖の湖畔清掃の行事に野尻湖小学校も全校で参加した。4年生の吉沢雄二君、松木勝彦君の2名が、東京大学の寮の付近の干上がった湖畔で、大型の神子柴型尖頭器（F(6-1)）1点を発見し、翌日、博物館に届けてくれた。ただちに現場を確認し、ほかには何も資料はえられなかったが、陸域側に分布する海端遺跡が湖底にも南西方向に拡大するものと判断し、遺跡の範囲を変更した（中村1988）。

小学生の発見が地元の信濃毎日新聞紙上で報道されてから、当時、長野県教育委員会文化課の専門主事であった小林孚氏より、ほぼ同じ地点と思われるところから神子柴型尖頭器1点が採集されていたことをご教示いただき、その石器を県教育委員会から野尻湖博物館に移管する労をとっていただいた。

F(6-2)の石器は、小諸市相生町の長崎忠夫氏が1959年8月3日に子供たちと野尻湖にキャンプに来て、湖中で水泳をしていて発見したものであり、1982年4月16日に県からの昭和56年度体育有功章受賞の返礼として、長野県知事に寄贈されたものとのことである。1987年6月8日、長野県教育委員会より野尻湖博物館に移管された。この石器は、森嶋（1988）に立が鼻遺跡出土として、実測図が集成されている。

なお、多くの研究で野尻湖周辺の石器が引用されたりして使用されることが多かったが、以上に記したとおり最初の森嶋（1968）の記載で正しい記載がされながら、図版に誤植があり、それが訂正されないまま間違った形で遺跡名の混乱が続いてきたことに関しては、留意することが必要である。

3　野尻湖周辺の神子柴型石斧の石材

写真図版7・8

七ッ栗遺跡（№42、43）

2点ともに酸性凝灰岩製の局部磨製石斧である。

№42(K2-2)、酸性凝灰岩。新鮮面は灰色で、風化面は灰褐色、リモナイト汚染部は濃褐色。細粒で、剥離面は平滑である。50μmほどの黄白色軽石（もしくは長石）、20～30μmの石英を多く含み、ごく細粒の黒色鉱物を含む。有孔虫化石を含む。

№43(K2-1)、酸性凝灰岩。風化面は淡灰褐色で、リモナイト汚染部は濃褐色。やや細粒で、剥離面は平滑である。石英、黒雲母、長石？、ごく細粒の黒色鉱物などを含む。石英などの鉱物の粒子は角張った形を呈していて、20～100μmほどの大きさである。

立が鼻遺跡（A）

黒色頁岩。粒子はシルトサイズである。風化面で確認しづらいが、100μmほどの有孔虫化石が含まれる。75μmの円磨された石英を含む。細粒のシルトが主体で、大きな粒子のものはきわめて少ない。

小丸山遺跡（B）

凝灰岩。風化面は淡灰色。50μmほどの石英が多く、

白色軽石もしくは長石を含む。有色鉱物は少ない。

砂間遺跡（C）

凝灰岩。新鮮面は暗オリーブ色で、風化面は暗灰褐色。50～60μmの石英、40μmの黒雲母を含み、微細な黒色鉱物を含む。細粒部は緻密細粒である。平行ラミナが発達する。

上ノ原遺跡第１次調査（D）

酸性凝灰岩。新鮮部は淡灰色、風化部は灰褐色。20～30μmの黄灰色の軽石（もしくは長石）が多く、80μmの石英、20μmほどの黒色物質などが含まれる。120μmの有孔虫化石が含まれ、保存はいい。

狐久保遺跡（E）

注記番号Y-11、凝灰岩。新鮮面は暗灰色で、風化面は淡灰色。20μm以下の長石を多く含み、20～75μmの石英、20～30μmの黒色鉱物か岩片ないし炭化物を含む。粒子は角が少しとれている。

野尻湖周辺の神子柴型石斧の石材の特徴

立が鼻例以外はすべて凝灰岩製である。いずれも石英、長石、軽石などが含まれる酸性凝灰岩である。特に、七ッ栗遺跡、小丸山遺跡、上ノ原遺跡第１次などの石材は、神子柴遺跡の局部磨製石斧№１（MA６）、№９（MA33）と共通するもので、小瀬が沢洞窟に多い白色凝灰岩に近いものの可能性がある。また、立が鼻遺跡の黒色頁岩は、唐沢Ｂ遺跡のものとの関係が注目されるところである。

今回、石材の詳細記載をしていない高速道関係の遺跡のものでは、星光山荘遺跡が16点中で凝灰岩６点、凝灰質砂岩５点、砂岩５点、七ッ栗遺跡が凝灰岩１点、大平遺跡が凝灰質頁岩２点、東裏遺跡が凝灰岩２点であり、仲町遺跡は何点かあるが最も形態的に整ったNo6019は凝灰岩で、ほかに頁岩、安山岩などという記載がある。

神子柴型石斧の使用石材を比較すると、顕著な地域性があることがうかがえる。伊那谷にある神子柴遺跡では、石斧13点中で黒雲母粘板岩・砂岩（ホルンフェルス系）７点（54%）、凝灰岩５点（38%）と、ホルンフェルス系が多い。群馬県境に接する東信の菅平高原にある唐沢Ｂ遺跡では、石斧11点中で黒色頁岩（64%）、砂岩、硬質頁岩、ホルンフェルス各１点（各９%）と、黒色頁岩が主体である。野尻湖周辺の石材詳細記載をおこなったものだけをみると、７点中で凝灰岩６点（86%）、黒色頁岩１点（14%）と、凝灰岩が主体を占めている。このように領家変成岩に由来するホルンフェルス系（伊那谷）、群馬・新潟県境の第三紀層に由来すると推定される黒色頁岩（菅平）、新潟県下の第三紀層に由来すると推定される凝灰岩（野尻湖）は、それぞれの地域の石斧素材を代表するものとなっている（中村2008、森嶋ほか編1998）。

4　神子柴系石器群の石器表面にみられる特徴と遺跡での埋積条件　写真図版６

海端遺跡（F）の２点の神子柴型尖頭器は、片側のほぼ全面に褐鉄鉱（リモナイト）が付着していることが特徴である。この２点の石器は、湖底の表面近くに長年露出していたと推定されるものである。現在の湖底では、表面にある礫などが強く褐鉄鉱汚染を受けていることがしばしば認められる。湖底に沈殿した褐鉄鉱が石器に付着したと思われるもので、野尻湖底の遺跡にあった石器の特徴である。このような片面に強く面的な褐鉄鉱汚染を受けた石器は、立が鼻遺跡（A）の石斧の裏面、砂間遺跡（C）の石斧の裏面にともに認められる。このことから、AとCの石器は、採集者の吉松雄一氏の証言どおり、湖底にある立が鼻遺跡、砂間遺跡の採集（出土）品であることを物語っている。

一方、七ッ栗遺跡の石斧２点（42、43）は、ともに刃部の両面に不規則な面的に褐鉄鉱の汚染が付着している。このような褐鉄鉱は、地下水位の比較的高い遺跡の地下で、融雪期や降水量の多い季節には石器の上下の面が帯水することが多く、まわりの粘土質の地層が不透水層となって、石器の周りに水がたまりやすい環境をつくっていたことが推定される。

小丸山遺跡（B）の石器は、上記の２つとは異なっており、褐鉄鉱の付着は少なく、ドット状の褐鉄鉱があるほか、表面の一部には直線状の褐鉄鉱の付着が認められる。あまり鮮明でないので、近年の農耕具等の鉄との接触により生じたものかどうかは断言できないが、少なくとも水中にあった石器の特徴は見られず、地下水位が低くて、比較的乾燥した環境の風成層の中にあった石器の風化の特徴を示している。したがって、この石器は明らかに湖底の遺跡にあったものではなく、採集者の証言どおり小丸山遺跡のものとして間違いないと判断される。

（注１） これらの石器を発見し、考古学資料として世に残す努力を惜しまなかった、森嶋稔先生、池田寅之助氏、吉松雄一氏、小林孚氏、森山公一氏、長崎忠夫氏、吉沢雄二氏、松本勝彦氏らに厚く感謝する次第である。

（注２） 信濃町の神子柴系石器群の記述で、石器の遺跡名が間違っている主要文献（1980年代以前）は以下のとおりである。

○森嶋　稔（1968）　信濃20－４論文
P249　第３図説明
２：砂間（誤）→小丸山（正）、３：狐久保（誤）→砂間（正）、４：小丸山（誤）→４・５：狐久保（正）
※森嶋ほか編（1998）『唐沢Ｂ遺跡』に再録された上記論文は、この誤りを訂正している。

○森嶋　稔（1970）　信濃22－10論文
P900の後　第１図説明
35：妙間（誤）→小丸山（正）、36：小丸山（誤）→砂間（正）（なお29は所在不明の立が鼻の遺物）

○森嶋　稔（1976）　上水内郡誌
P61　図１－31説明
狐久保（誤）→砂間（正）

○岡本東三（1979）　奈文研論集Ⅴ　P50　図説明
69：小丸山（誤）→砂間（正）、70：砂間（誤）→小丸山（正）

○森山公一（1986）　長野県考古学会誌52
P５本文・P７第３図説明
44・45：狐久保（誤）→海端（正）
P16本文・P17第９図説明
43：狐久保（誤）→砂間（正）

○森嶋　稔（1988）　長野県史・遺構遺物編
P393　第283図
６：砂間（誤）→小丸山（正）、７：仲町（誤）→砂間（正）
P279　第279図
３：立が鼻（誤）→海端

Ⅷ　まとめ

１　旧石器時代の成果

旧石器時代は、Ⅰ区からⅥ区にかけての微高地を中心にナイフ形石器文化のブロック２基が検出された。礫群が２基検出され、それらの周りから黒曜石と玉髄を主要石材とする石器群が出土した。層位は上Ⅱ中部を中心とする。

ナイフ形石器は石刃を素材とする基部加工のものであるが、信濃町に多く確認される杉久保型ナイフ形石器とはやや異なり、基部を丸く仕上げるものが多い。彫器は10点と点数が多く、変化に富んでいる。掻器は６点あり、円形から方形の刃部をもつ。

Ⅰ区のブロック１の石器群は彫器が比較的多く組成されていることが特徴である。Ⅵ区のブロック２の石器群は掻器を多く保有することが特徴である。黒曜石、頁岩類、玉髄を主要石材とすること、そしてナイフ形石器の基部の形状などは共通するものがあり、両者は同一の石器群に属するともみられる。同一石器群だと考えると、掻器の特徴から信濃町内に多く確認されている杉久保石器群ではなく、東北～北陸地方に多いいわゆる東山系のナイフ形石器文化に属するものと考えられる。これまで、東山系のナイフ形石器文化に属する石器群は信濃町ではほとんど確認されていなかったので七ッ栗遺跡の石器群は杉久保石器群との関係を考える際に重要な存在となる。

杉久保石器群は、信濃町内では上Ⅱ上部文化層を中心に確認されており、七ッ栗遺跡の石器群はそれらより若干古い時期に位置づけられそうである。上Ⅱ中部は、野尻湖遺跡群ではあまり遺跡が確認されない層準であり、ヌカ１火山灰（姶良Tn火山灰）よりは上に位置し、最終氷期の最寒冷期、ないしそれより若干新しい時期と推定されている層準である。

野尻湖遺跡群の隣の飯山市付近の遺跡群には、東山系のナイフ形石器文化に属する石器群が多く知られており、それらとの関係解明が今後の課題である。

２　神子柴文化の成果

Ⅳ区より２点の神子柴型石斧が並んで検出された。周辺にはほかに遺物はみられず、この２点のみの出土であった。出土層位は上部野尻ローム層Ⅱ中のモヤ上部の下面から下半部の層準である。出土状況から「デポ」遺構と考えられる。全国的に見ても僅少な例となり貴重である。時期的な位置づけは、近隣の遺跡との対比から縄文時代

草創期隆線文土器段階と考えられるが、石器のみの出土であり、今後の類例の増加を待ちたい。

野尻湖周辺では神子柴型石斧が多くの遺跡から出土しているが、それらの石材を鑑定したところ凝灰岩製のものが多いことが判明した。この石材は新潟県域の第三紀層に由来するものと推定される。

3　縄文時代の成果

縄文時代の遺物は、おもに I 区を中心に出土した。縄文時代早期から中期初頭のものがみられた。早期前半の立野式土器に伴うと思われる表裏縄文土器、撚糸文土器が最も古いものである。次いで、押型文土器後半のもの、早期後半の条痕文土器などがわずかにみられる。

前期には、前葉の関山式土器がわずかにみられる。その次の中葉の黒浜式土器、さらに後葉の諸磯ａ式、諸磯ｃ式土器などが出土している。さらに中期前葉の梨久保式土器がわずかにえられている。

このように七ッ栗遺跡では、縄文時代早期から中期初頭まで連綿と人々が住み続けていたことが判明した。縄文時代の遺構は未確認で、また石器の出土数もそれほど多くはないことから、縄文時代の生活の場の中心はもう少し比高の高いところにあった可能性が考えられる。

引用文献

大竹憲昭（2003）「旧石器時代」『長野市史・第12巻資料編・原始古代中世』２－８頁

岡本東三（1979）「神子柴・長者久保文化について」『研究論集』Ⅴ　奈良国立文化財研究所学報、３－57頁

佐川正敏・鈴木　雅編（2006）『山形県東置賜郡高畠町　日向洞窟西地区出土石器群の研究Ⅰ　縄文時代草創期の槍先形尖頭器を中心とする石器製作址の様相』東北学院大学文学部史学科佐川ゼミナール　山形県東置賜郡高畠町教育委員会・山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

佐原真（1985）「ヨーロッパ先史考古学における理納の概念」『国立歴史民俗博物館研究報告』第７集、523－573頁

信濃町教育委員会（2003）『信濃町の遺跡分布図』　信濃町教育委員会

鈴木孝司・鎌田俊昭（1971）「北上川中流域の石器－その１－」『遺光器』５号　みちのく考古学研究会、13－15頁

田中英司（1995）「日本先史時代のデポ」『考古学雑誌』第80巻第２号、１－71頁

田中英司（2001）『千葉大学考古学研究叢書１　日本先史時代におけるデポの研究』、236頁

谷和隆編（2002）『県単道路改良(一)古間(停)線埋蔵文化財発掘調査報告書―信濃町内―吹野原Ａ遺跡』　長野県埋蔵文化財センター

丹野雅人編（1999）『多摩ニュータウン遺跡－No.72・795・796遺跡－(１)』　東京都埋蔵文化財センター

立木宏明（2004）『愛宕澤遺跡発掘調査報告書』　新潟県新津市教育委員会

土屋積・谷和隆編（2000）『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15　一信濃町　その１－日向林Ｂ遺跡・日向林Ａ遺跡・七ッ栗遺跡・大平Ｂ遺跡』　長野県埋蔵文化財センター

土屋積・谷和隆編（2000）『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15　一信濃町　その１－裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡』　長野県埋蔵文化財センター

土屋積・中島英子編（2000）『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16　一信濃町　その２－　星光山荘Ａ・星光山荘Ｂ・西岡Ａ・貫ノ木・上ノ原・大久保南・東裏・裏ノ山・針ノ木・大平Ｂ・日向林Ａ・日向林Ｂ・七ッ栗・普光田　縄文時代～近世』　長野県埋蔵文化財センター

鶴田典昭ほか編（2004）『一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書、信濃町内その３、仲町遺跡』長野県埋蔵文化財センター

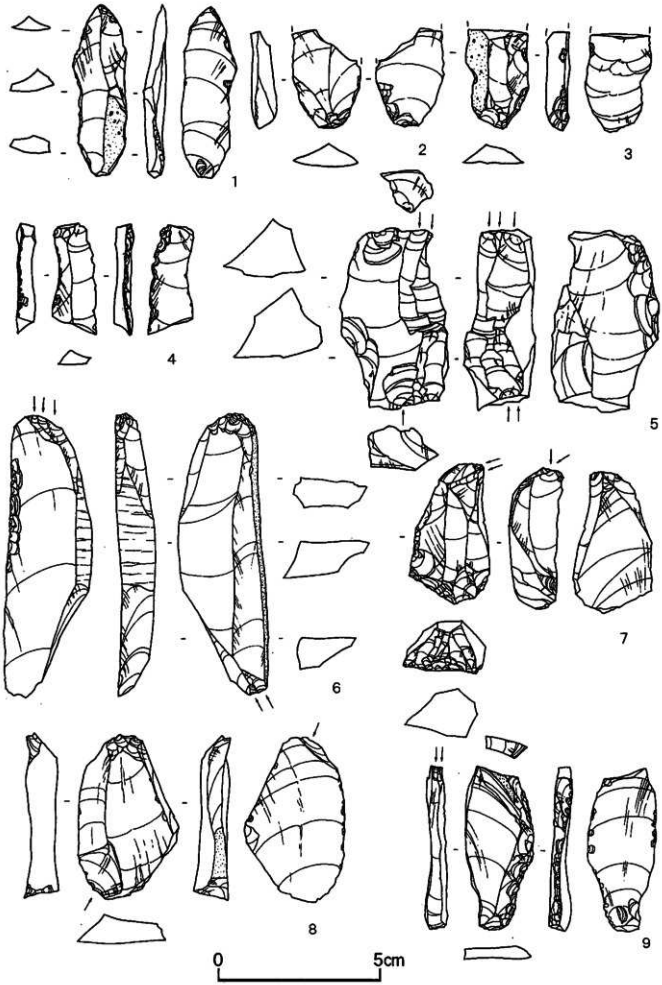
中村由克（1988）「昭和62年度に野尻湖博物館によせられた考古資料」『信濃考古』105号、３－４頁

中村由克（1992）「長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構１・２」『考古学ジャーナル』342号、42－44頁、344号、33－36頁

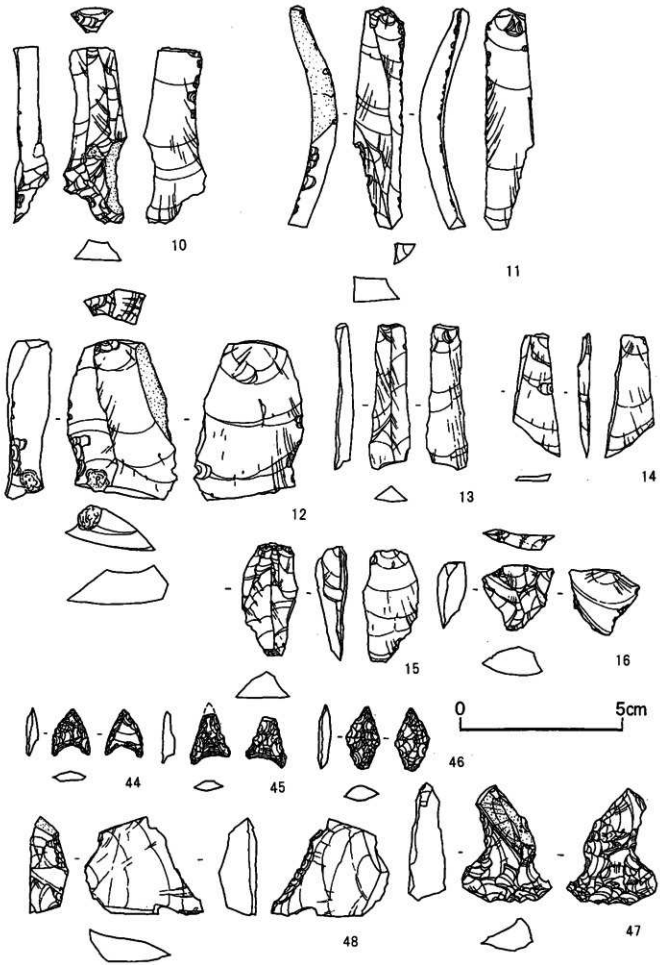
中村由克（2004）『杉久保遺跡出土の石器―資料図録―』野尻湖ナウマンゾウ博物館
中村由克（2008印刷中）「神子柴遺跡出土石器の石材とその原産地の推定」林茂樹・上伊那考古学会編『神子柴』信毎書籍
贄田明（1998）「第５章遺物、第１節１縄文時代早期末葉～前期後葉土器」上田編『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書４、長野市内その２、松原遺跡　縄文時代』長野県埋蔵文化財センター
野尻湖人類考古グループ（1987）『野尻湖発掘の考古学的成果第１集　野尻湖遺跡群の旧石器文化Ⅰ』
野尻湖人類考古グループ（1994）「野尻湖遺跡群における文化層と旧石器文化」『野尻湖博物館研究報告』２号、１－16頁
橋詰潤（2004）「野尻湖周辺における神子柴系石器群」『旧石器考古学』65、87－94頁
藤沢宗平・林茂樹（1961）「神子柴遺跡　―第一次発掘調査概報―」『古代学』第９巻第３号、142－158頁
前山精明（1993）「石斧」『新潟県小瀬が沢洞窟遺跡出土遺物の再検討』、84－86頁　日本考古学協会新潟大会実行委員会
森嶋稔（1968）「神子柴型石斧をめぐっての試論」『信濃』20－４、11－22頁
森嶋稔（1970）「神子柴型石斧をめぐっての再論―その神子柴型石斧の系譜について―」『信濃』22－10、156－172頁
森嶋稔（1976）「旧石器時代」『長野県上水内郡誌・歴史編』
森嶋稔（1988）「神子柴系石器群」『長野県史・考古資料編：遺構・遺物編』、354－397頁
森嶋稔ほか編（1998）『唐沢Ｂ遺跡　後期旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての移行期の石器群』　千曲川水系古代文化研究所
森山公一（1986）「神子柴型尖頭器にみられる抉入部をめぐって」『長野県考古学会誌』52号、１－21頁

図　　版

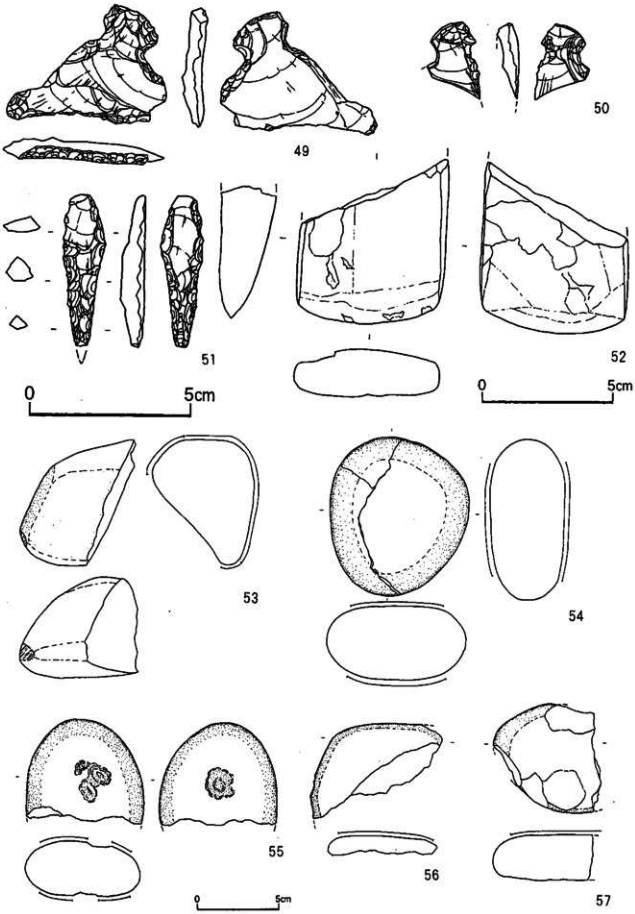
石器図版	1・2	Ⅰ区旧石器時代	P33・34
	2～4	Ⅰ区縄文時代	P34～36
	5～7	Ⅵ区旧石器時代	P37～39
	8・9	Ⅳ区局部磨製石斧	P40・41
土器図版	1～5	縄文土器	P42～46
	6	縄文土器	P36
写真図版	1～8	局部磨製石斧関連（カラー）	P47～54
	9・10	局部磨製石斧関連	P55・56
	11～14	Ⅰ区～Ⅵ区	P57～59
	15～17	石器　旧石器時代	P61～63
	17・18	石器　縄文時代	P63・64
	18～20	石器　剝片類	P64～66
	20～24	縄文土器	P66～70



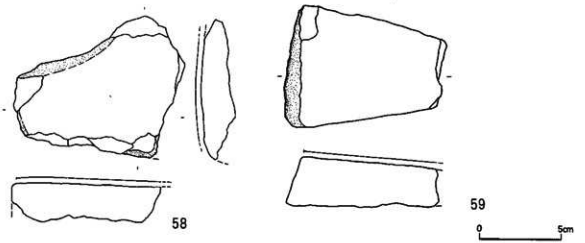
石器図版１　七ッ栗遺跡Ⅰ区の石器（１）　旧石器時代



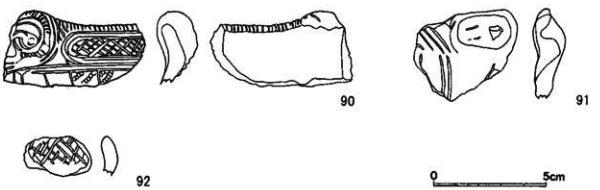
石器図版２　七ッ栗遺跡Ⅰ区の石器（２）　旧石器時代・縄文時代（44－48）



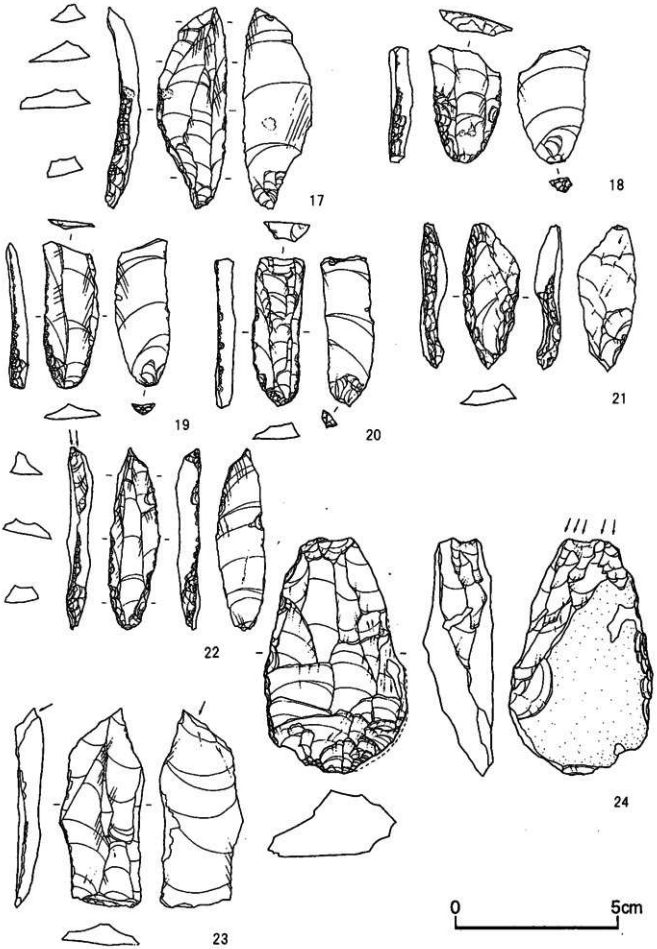
石器図版3　七ッ栗遺跡Ⅰ区の石器(3)　縄文時代



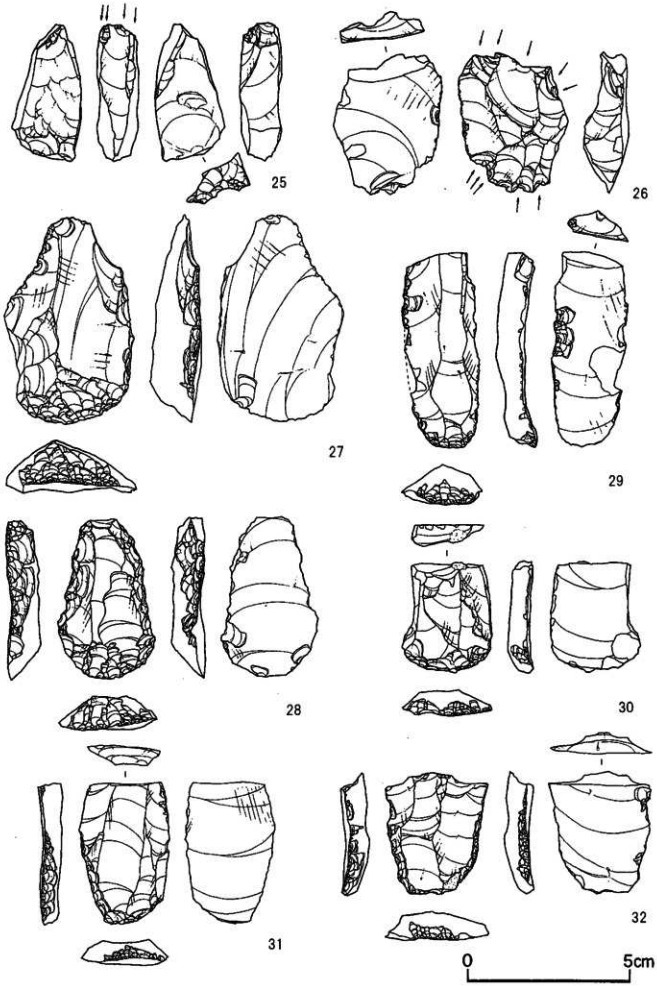
石器図版4　七ッ栗遺跡Ⅰ区の石器(4)　縄文時代



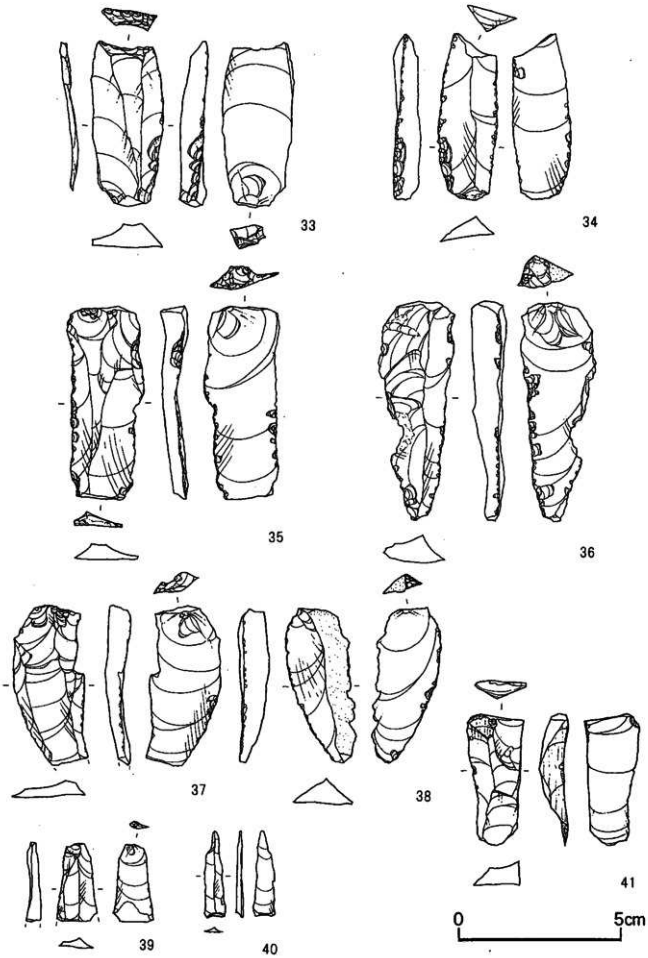
土器図版6　七ッ栗遺跡の縄文土器(6)



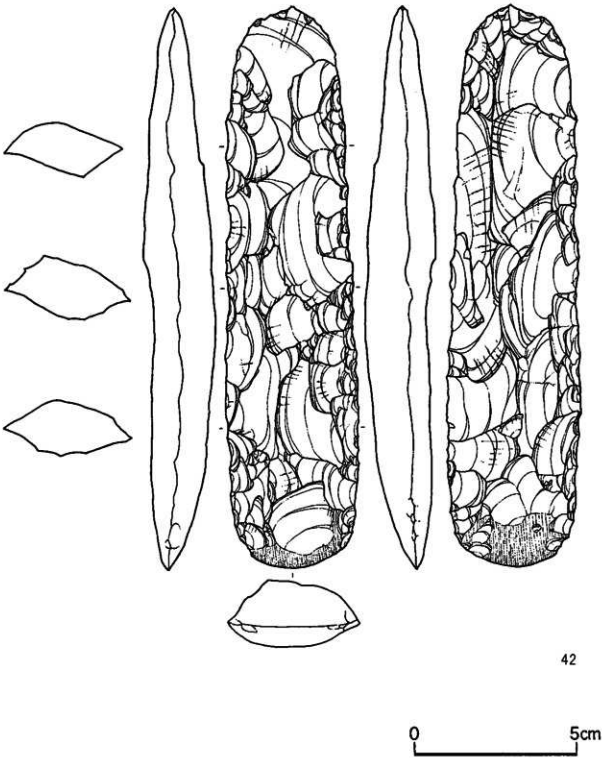
石器図版5　七ッ栗遺跡VI区の石器(1)　旧石器時代



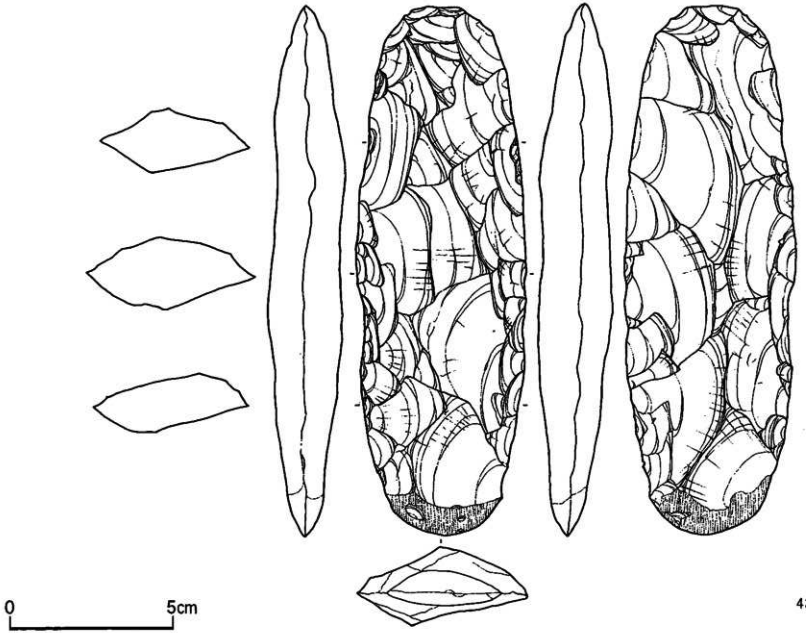
石器図版6　七ッ梨遺跡VI区の石器(2)　旧石器時代



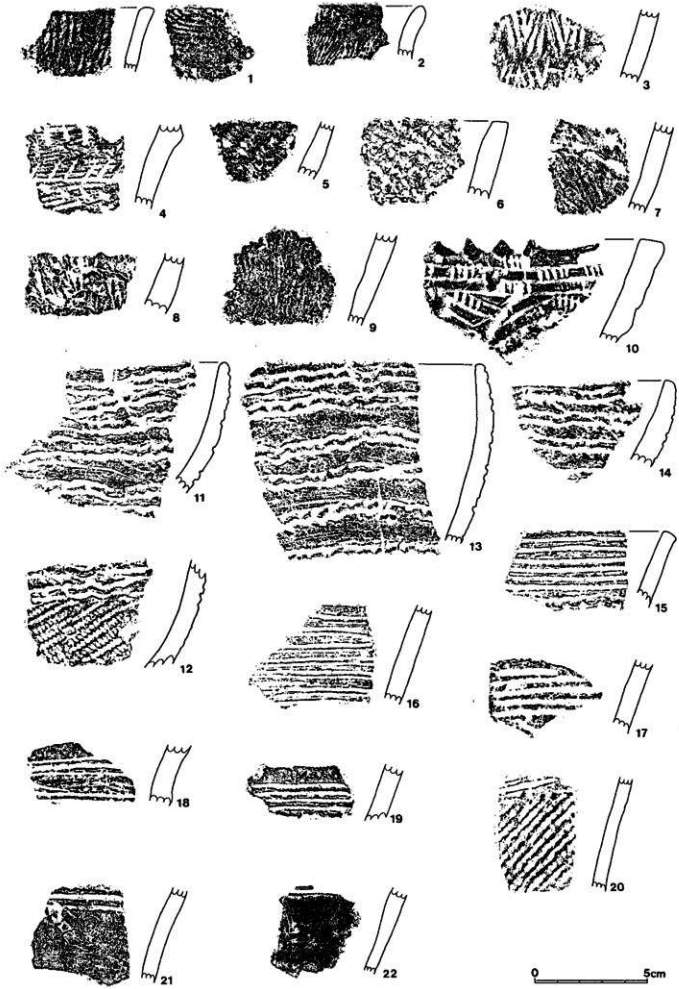
石器図版７　七ッ栗遺跡Ⅵ区の石器（３）　旧石器時代



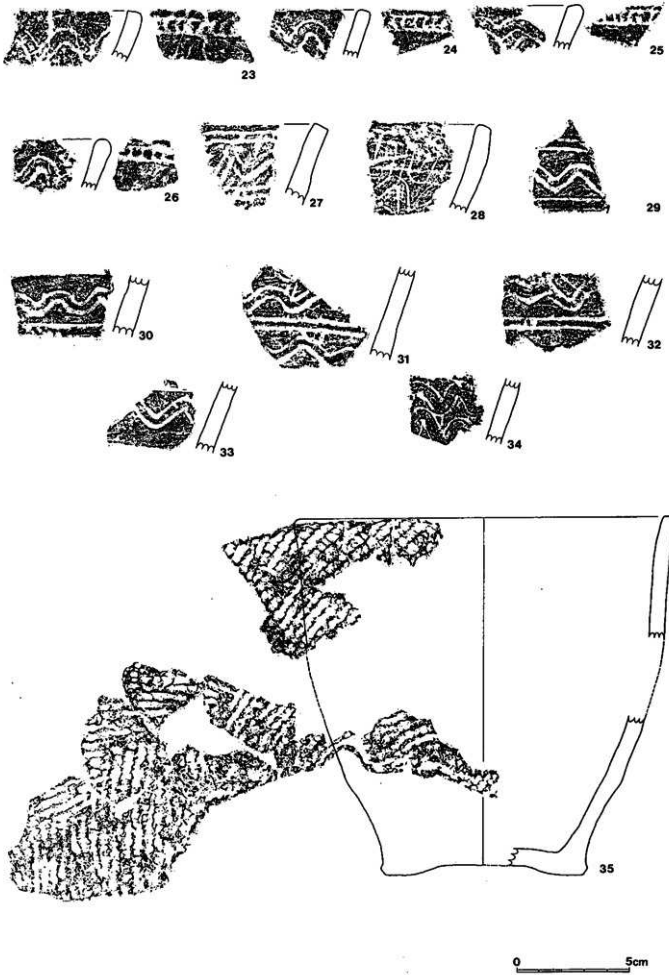
石器図版8　七ッ栗遺跡の局部磨製石斧(1)



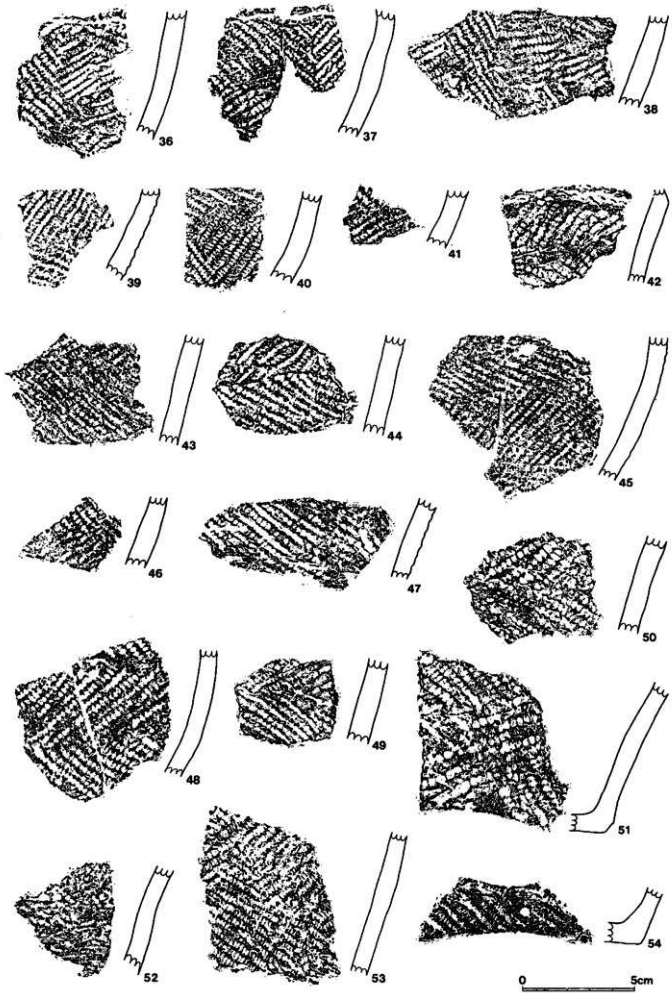
石器図版9　七ヶ栗遺跡の局部磨製石斧（2）



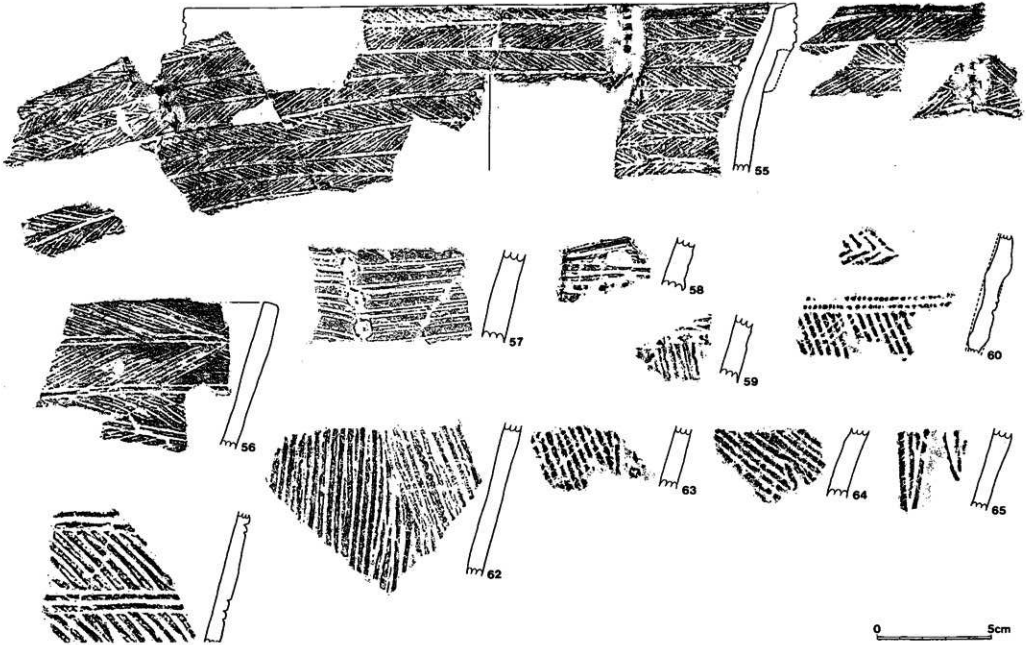
土器図版1　七ッ栗遺跡の縄文土器(1)



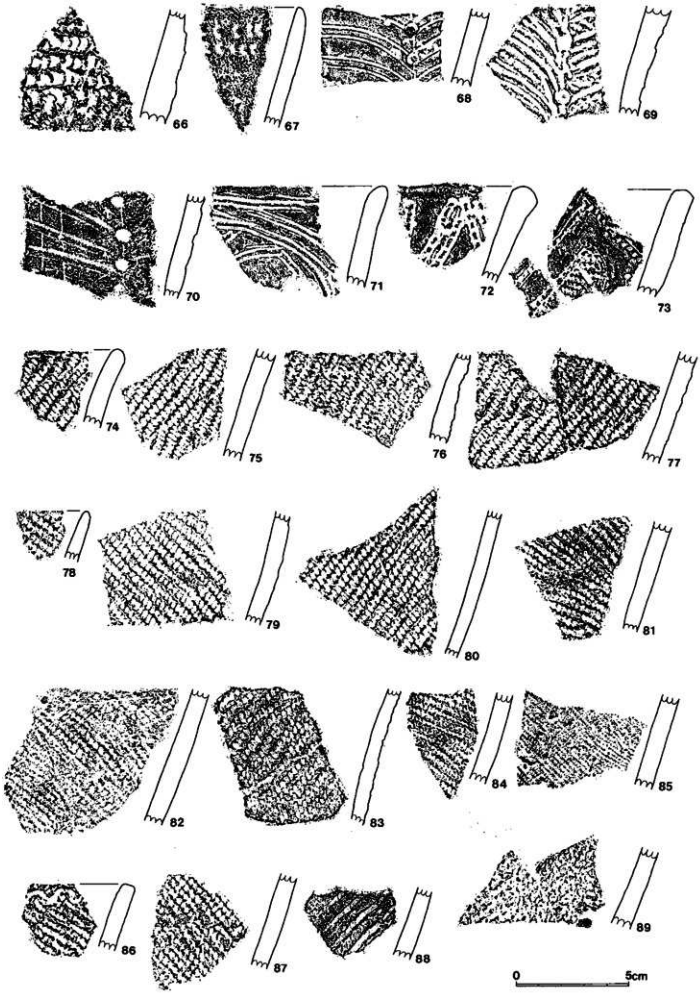
土器図版２　七ッ栗遺跡の縄文土器（２）



土器図版3　七ッ栗遺跡の縄文土器(3)



土器図版4　七ッ栗遺跡の縄文土器(4)



土器図版5　七ッ梁遺跡の縄文土器(5)

1　局部磨製石斧の出土状況

2　局部磨製石斧の出土状況と壁面の層位

3　局部磨製石斧No.42（94NN K2-2）

4　局部磨製石斧No.43（94NN K2-1）

1　立が鼻遺跡(A)

2　小丸山遺跡(B)

3　砂間遺跡(C)

4　上ノ原遺跡第1次(D)

5　狐久保遺跡(E)

0　5cm

5　野尻湖周辺の神子柴系石器群(1)

6　海端遺跡(F)

7　砂間遺跡(C)

0　5cm

6　野尻湖周辺の神子柴系石器群(2)

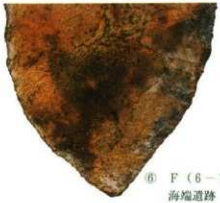
① 七ッ栗遺跡No.42

② 七ッ栗遺跡No.43

③ B 小丸山遺跡 左・中：刃部、右：背面中央

④ A 立が鼻遺跡

⑤ C 砂間遺跡



⑥ F（6－1）
海端遺跡

0 5cm

7 野尻湖周辺の神子柴系石器群の拡大写真

顕微鏡写真 ×10 0 5mm ×40 0 1mm

① 七ッ梨遺跡No.42 有孔虫化石、石英を含む ×40

② No.42 酸性凝灰岩 ×10

③ 七ッ梨遺跡No.43 黒雲母を含む ×40

④ No.43 酸性凝灰岩 ×10

⑤ 立が鼻遺跡(A) 石英を含む ×40

⑥ A 立が鼻遺跡 新鮮部 ×40

⑦ A 黒色頁岩 ×10

⑧ 小丸山遺跡(B) ×40

⑨ B 凝灰岩 ×10

8 野尻湖周辺の神子柴型石斧の石材顕微鏡写真(1)

顕微鏡写真 ×10 0 5mm ×40 0 1mm

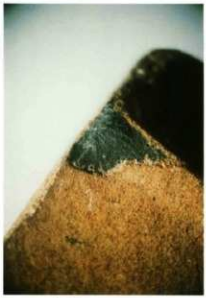
⑩ 砂間遺跡(C) ラミナがみられる ×40

⑪ C 新鮮部 ×40

⑫ C 凝灰岩 ×10

⑬ 狐久保遺跡(E)

⑭ E 新鮮部 ×40



⑮ E 凝灰岩 ×10

⑯ 上ノ原遺跡第1次(D) 新鮮部 ×40

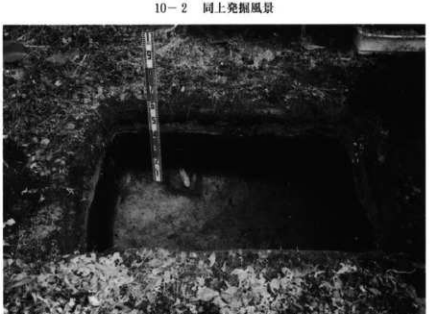
⑰ D 有孔虫化石を含む ×40

⑱ D 酸性凝灰岩 ×10

9 野尻湖周辺の神子柴型石斧の石材顕微鏡写真(2)

10－1　Ⅳ区石斧出土地周辺の発掘状況（石斧は中央奥）

10－2　同上発掘風景



10－3　1年目（1993年）の試掘調査で出土、正式な記録は2年目におこなう

11　石斧出土地点の地質層位（図15に対応する）

12　石斧出土位置の拡大　地層名は図15による（石斧は中央とやや左側）

13　石斧（K2-2；No.42）直下のパイプ状生物擾乱部の外形（発掘後）

14　Ⅰ区遺物出土状況（縄文・平安時代）

15　Ⅰ区発掘風景（平安・縄文時代）

16　Ⅰ区発掘風景

17　Ⅰ区発掘風景　遺物記載

18　Ⅰ区遺物出土状況（縄文・平安時代）（南側より）

19　Ⅰ区発掘終了後

20　Ⅰ区西側壁面　手前は1号礫群、上Ⅱ最下部まで掘削

21　Ⅰ区1号礫群　上より

22　同上　東側より

23　同上　ななめより

24　Ⅰ区彫器の出土状況

25　Ⅰ区縄文土器の出土状況

26　Ⅰ区１号礫群の実測風景

27　試掘調査　Ⅱ～Ⅴ区

28　試掘調査　Ⅴ区より北側

29　Ⅴ区発掘風景

30　Ⅵ区発掘風景　県道側（西）より

31　Ⅵ区発掘風景　遺物測量

32　VI区遺物出土状況　ブロック2

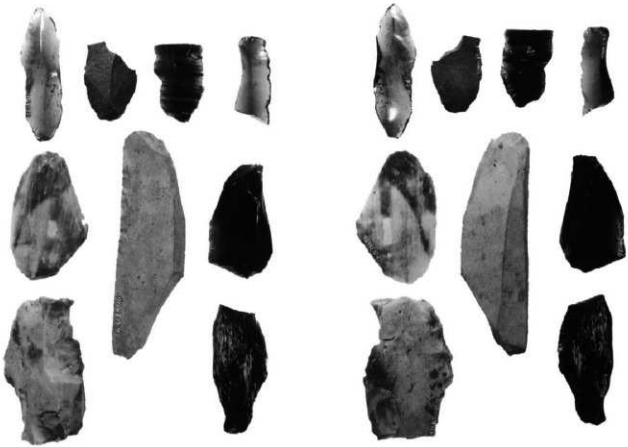
33　VI区東側　縄文時代遺物集中地点

34　VI区2号礫群実測風景

35　VI区2号礫群

36　VI区掻器出土状況

37　同左　上II中部より出土



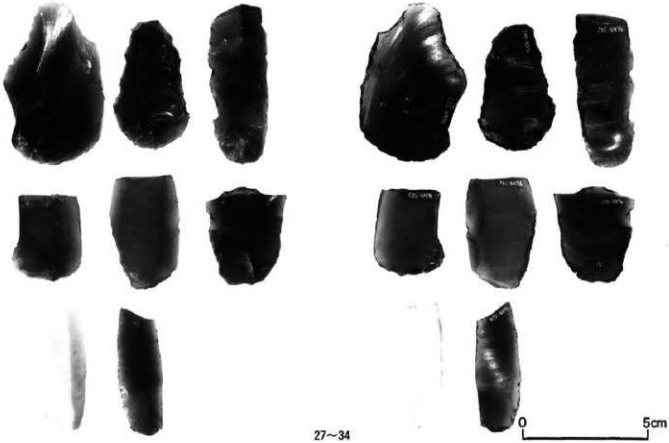
1～9

10～16

0　5cm

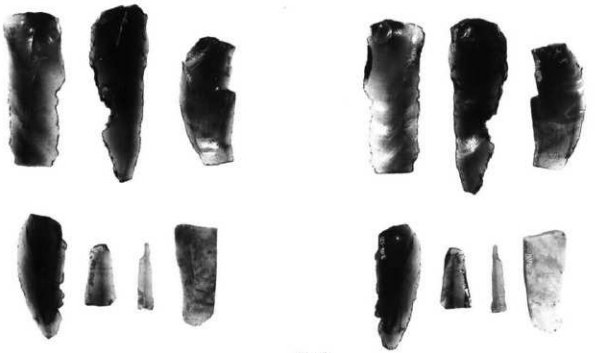
38　I区の石器　旧石器時代

17～26



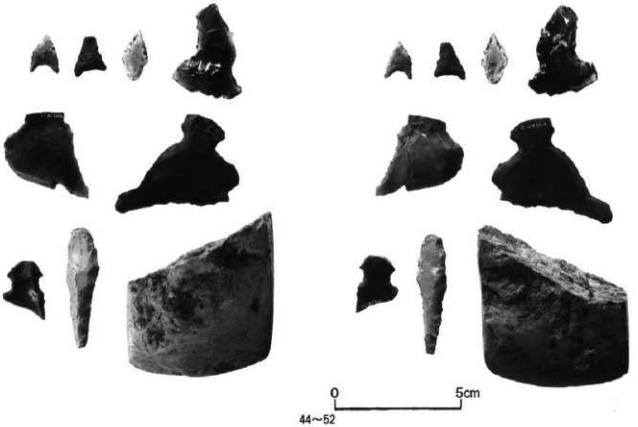
27～34

39　VI区の石器　旧石器時代



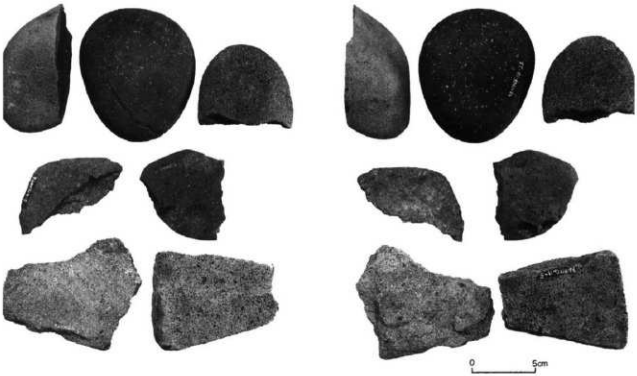
35～41

40　VI区の石器　旧石器時代



44～52

41　I区の石器　縄文時代

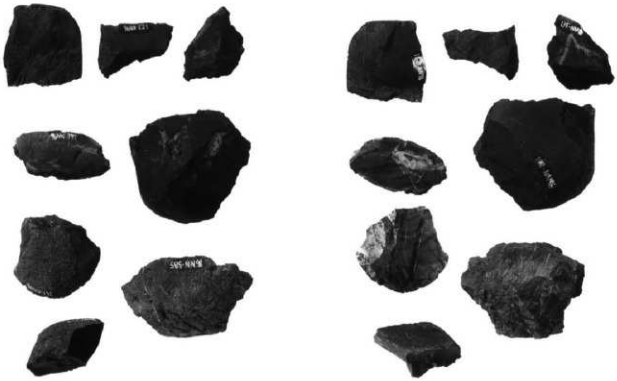


53～59

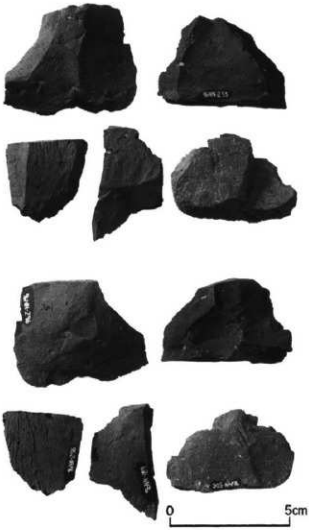
42　I区の石器　縄文時代

43　VI区の石器　下呂石（旧石器時代・ブロック２）No.60

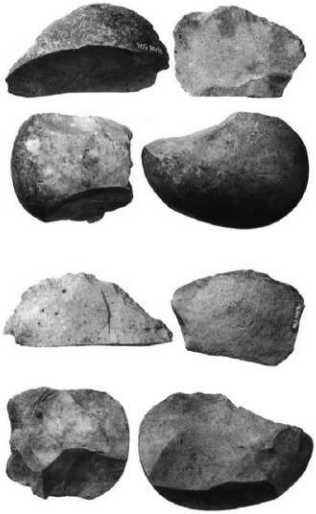
44　VI区の石器　黒曜石製剥片



45　VI区の石器　チャート製剥片・石核



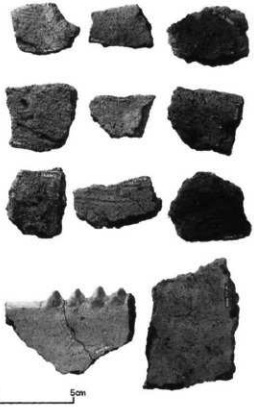
46　VI区の石器　無斑晶質安山岩製剥片



47　VI区の石器　凝灰質頁岩製剥片・石核

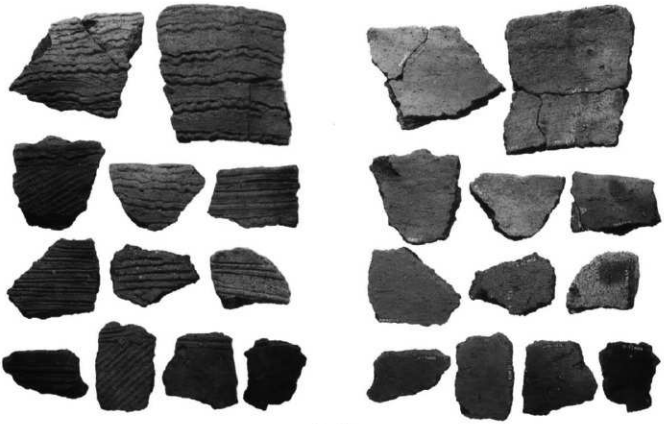
48　VI区の石器　凝灰岩製剥片

49　VI区　縄文時代遺物集中地点出土の遺物

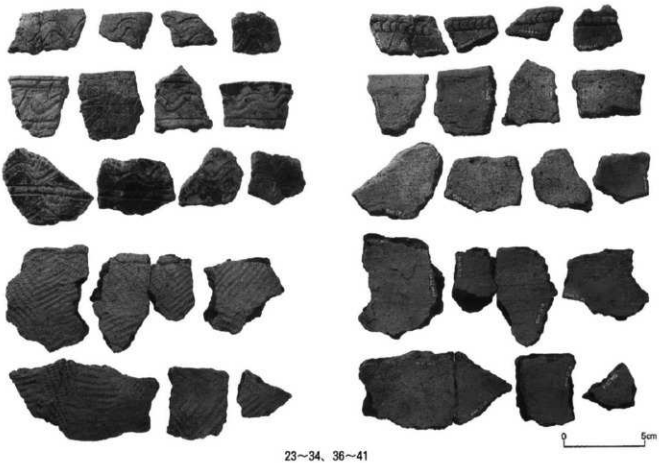


1～10、53

50　I区の縄文土器

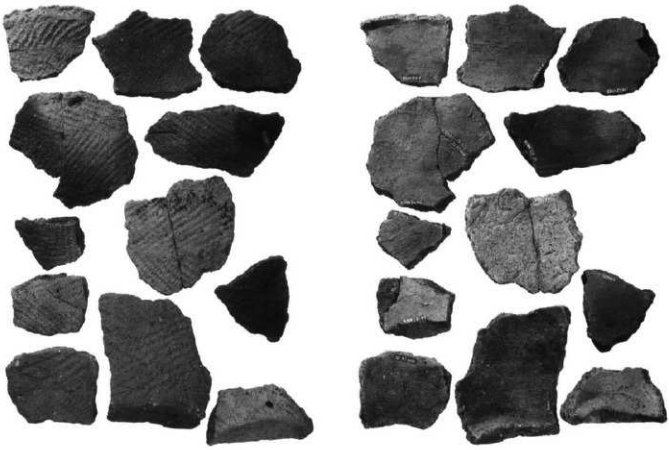


11～22

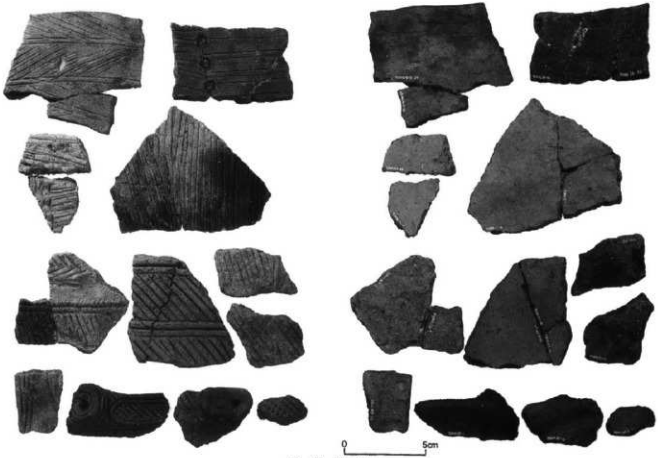


23～34、36～41

51　I区の縄文土器



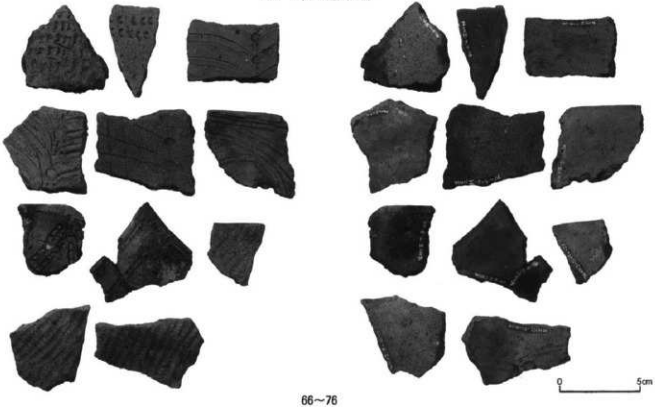
42～54



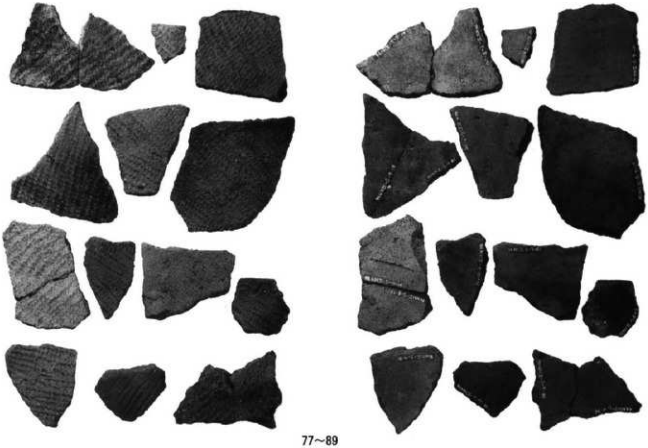
56～65、90～92

52　Ⅰ区の縄文土器

53　Ⅰ区の縄文土器



54　Ⅱ～Ⅴ区の縄文土器



77～89

55　Ⅱ～Ⅴ区の縄文土器

56　Ⅵ区の縄文土器

SUMMARY

The Nanatsuguri site is located at Nanatsuguri, Mizuana Tominou, Shinano-machi, in the North of Nagano prefecture, Central Japan. It is situated on lat. 36° 48′ 16″ N., long. 138° 13′ 55″ E., and is between 643 and 648 meters above sea level. The excavation was carried out from October 19th 1993 to July 25th 1994, by the Shinano Town Board of Education, prior to the construction of the local road, the Mizuana-Furuma station line. The second excavation was carried out from September 17th to October 23rd 1996, by the Shinano Town Board of Education, prior to the construction of the local road, the Fukouji line. The total excavation area is about 2,560 square meters.

The Late Quaternary sediments are divided into 3 formations as follows; Nojiri Loam Formation, Kashiwabara Black Ash Formation, and surface soil, in ascending order.

The remains that totaled 1,247 were excavated from four cultural layers, the Upper Nojiri Loam Formation (Pleistocene) and the Kashiwabara Black Ash Formation (Holocene).
There were 351 pieces of Palaeolithic and Jomon Period stone tools, 413 pieces of Jomon pottery, 30 Heian age pottery, 437 pieces of gravels and so forth.

Most of the artifacts from the Nanatsuguri site belong to the Palaeolithic Period, the transitional lithic industry of the Late Palaeolithic to the Incipient Jomon Period, the Jomon Period (from Initial Period to Middle Period), and Heian Period. The results of the excavation are as follows.

1. Late Palaeolithic Period (about 20,000~15,000y.B.P.)

Among the 41 pieces of stone tools and fragments found, most of them belong to the late half of the Late Palaeolithic Period.

Backed blades, gravers, scrapers, blades, were yielded from middle horizon of the Upper Nojiri Loam Member II. The lithic materials used for the artifacts found at the Nanatsuguri site are: obsidian, siliceous shale, tufferceous shale, chalcedony, and andesite.

2. "The Mikoshiba-type industry" (about 13,000y.B.P.)

Two edge-ground axes of the Mikoshiba-type were discovered, and belong to the transitional lithic industry of the Late Palaeolithic to the Incipient Jomon Period. Two axes were unearthed side by side, laid butt of an axe on the other's butt. But, no evidence of pits around and under the axes were found. The raw material for axes are acidic tuff.

3. Jomon Period

1) Initial Jomon Period (about 8000~7000y.B.P.)

"Hyori-jomon pottery" (pottery with cordmarking on both internal and external walls), and "Oshigata-mon pottery" (pottery decorated with dowel-impressed patterns) belong to the early half of the Initial Jomon period.

2) Early Jomon Period (about 6000~5000y.B.P)

"Sekiyama type pottery", "Kurohama type pottery" and "Moroiso a and c type pottery" were yielded.

3) Middle Jomon Period (about 5000~4500y.B.P)

"Nashikubo type pottery" belong to the earliest stage of the Middle Jomon Period.

4. Heian Age (about 1200-1000y.B.P.)

A few fragments of pottery found, most of them belong to the late half of the Heian Age.

報告書抄録

書名	七ツ栗遺跡発掘調査報告書
副書名	―神子柴型石斧と旧石器・縄文時代の遺跡―
シリーズ名	信濃町の埋蔵文化財
シリーズ番号	
編著者名	中村由克・立木宏明
編集機関	信濃町教育委員会
所在地	389-1305　長野県上水内郡信濃町柏原428-2　TEL 026-255-5923
発行年月日	2008年2月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
七ッ栗遺跡（ななつくりいせき）	長野県上水内郡信濃町大字富濃字七ッ栗（ながのけんかみのちくんしなのまち／なるみとんのうあざなつくり）	205834	106	Ⅰ・Ⅵ区 36(36)度 48(48)分 16(05)秒	138(138)度 13(14)分 55(06)秒	931019 ～ 940725	2560㎡	県道建設
				Ⅳ区 36(36)度 48(48)分 22(11)秒	138(138)度 14(14)分 00(11)秒	960917 ～ 961023		町道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
七ッ栗遺跡	散布地	旧石器時代	礫群2、ブロック2	ナイフ形石器、彫器、掻器、石刃	後期旧石器時代のナイフ形石器群が2ブロックから出土した。 神子柴型石斧2点が基部を重ねた状態で並んで出土した。
		旧石器末～縄文草創期		神子柴型石斧2	
		縄文早期 前期 中期		表裏縄文土器・押型文土器 関山式・黒浜式・諸磯式土器 梨久保式土器	
		平安時代		土師器	

(注)北緯・東経は世界測地系による。(　)内に旧日本測地系を示す。

信濃町の埋蔵文化財

七ッ栗遺跡発掘調査報告書

－神子柴型石斧と旧石器・縄文時代の遺跡－

編集発行　信濃町教育委員会
長野県上水内郡信濃町柏原428－2

発行日　2008年２月22日

印　刷　信毎書籍印刷株式会社

〔この報告書についての連絡先〕

野尻湖ナウマンゾウ博物館

〒389-1303　長野県上水内郡信濃町野尻287-5

TEL 026-258-2090

FAX 026-258-3551

Archaeological Reports of Shinano-machi

Nanatsuguri Site

Excavation of a Late Palaeolithic and Early Jomon Site

2008

Shinano-machi Board of Education,
Kamiminochi-gun, Nagano, 389-1305 Japan.